【論文】

忘却の集合的創造――古典の将来　1

The Collective Making of Forgetting: Futures of Classics 1

氏川　雅典†

ホームズがコペルニクスの地動説も太陽系の仕組も知らないことを偶然発見したとき、わたしの驚きは頂点に達した。この十九世紀に生きる文明人で、地球が太陽の周りを回っていることを知らない人間がいるとは、信じられなかったのだ。

「驚いているようだね」わたしのびっくりした顔を見て、ホームズは笑った。「知ってしまったから、今度は忘れるように努力しよう」

「忘れるだって！」　(Doyle [1888]1993＝[1997]2014: 32)

1　忘却を想起する――新しいアイデアの社会学の場合

1.1　記憶と忘却をめぐる6題

1.1.1　生国への回帰――晩年の柳田国男

「時に君はタカボコでしたね。大間知君は越中でしたね……」

「はい……」

そうして話しがすすむ。

「時に君はタカボコでしたね……」

そのへんで私は氣づかされてきた。私は息を飲んだ。四－五分もすると話が戻ってくる。それが繰返される。……大腦整理とか神經生理とかいうところで、大木のコルク質にぼくぼくの部分が出來たような變化が生じているらしい。……。

私は打ちひしがれて電車に乗り、打ちひしがれたままで家に歸つて行き、模様を話してからも腰の抜けたような氣持ちでいた。(中野 1968: 2)

1.1.2　I. カントの記憶術と忘却のためのメモ

「ランペの名は今後すっかり忘れてしまわねばならない」

哲学者I. カントの社交を支えていたのは彼の驚異的な記憶力であった。知人・友人を自宅に招いた会

†立教大学社会学部教育研究コーディネーター

食の場で、常に多くの逸話を諳んじていた。I. カントは自身の記憶術を学生たちに熱心に勧めた。「まず、今までにたくわえた科学的知識を、種々の事項に分類して頭の中に覚えておく――次に、新しい未知の思想が出てくる書物や雑誌を読んだときには、……今読んだ事がらはどの部門もしくは事項にはいるのであるか――それをどこへもっていけばよいかと自問してみるのである。こういうふうにすると、いま読んだことや新しく習ったことは忘れられないで、いっそうよく印象づけられる」。

そのI. カントも老境に入ってからは、自身の記憶力の衰えを自覚するようになり、備忘用のメモを使うようになった。長年I. カント家には家政夫ランペが、「カントとランペ。前者はすなわち頭脳が一切であり、後者はすなわち手が一切であった」と評されるほど忠実に勤めていた。先の一文は、そのランペを解雇してしばらくしてからのI. カントのメモである。彼は忘れるために書いた（Borowski et al. [1804]1912=1967: 88, 227, 268, 275, 303）。

晩年のI. カントは今でいう認知症の症状が顕著になるが、古典学者H. ヴァインリヒは自身の著作の中で、ランペとの別離がその究極の一押しになったのではないかと推測している（Weinrich 1997=1999: 149）。

1.1.3 頭の中の散歩

ソ連の心理学者のA. ルリヤは、ある記憶術師の方法について次のように報告している。その男は多くのことを記憶できるのみならず、時間がたっても誤ることなく再現できた。何かの語を聞いたり、読んだりした場合、それらは非常に鮮明な「イメージ」として現れる。時にイメージの捨象と抽象を加えながら、その男は、頭の中の「モスクワ通り」に沿って諸イメージを「配列」していった。イメージに基づいて記憶を行う際に必要なことは、「頭の中を散歩」し、指示された対象の像を見つけ、ただ見るだけで十分なのである。場所、イメージ、順序といった余剰的情報が、かえって正確な想起を保証していた（Luria 1968=[1983]2010: 15-86）。

1.1.4 古代記憶術――場所、イメージ、順序

キケロは『弁論家について』において、記憶術の創始者であるケオス島出身の抒情詩人シモニデス（556 B.C-468 B.C）のエピソードを紹介している。拳闘家スコパスの館で催された祝宴においてシモニデスは、スコパスを讃える頌歌を依頼された。その詩は慣例に倣い双子神カストルとポルックスを讃えていたため、スコパスは報酬の半分は神々から貰うがいいと言い放った。ほどなくして、シモニデスは知らない若者二人が戸口で呼んでいるとの知らせを受け、館の外にでると、誰もいない。その間に、館の天井が崩落し、スコパスをはじめ他の客人たちは下敷きとなり圧死してしまった。

身内の者たちが亡骸を埋葬しようとしたが損傷がひどく見分けがつかない。その時、シモニデスは各人の席を覚えていたため、身元を明らかにすることができた。この経験から、シモニデスは「順序」が鮮明な記憶をもたらすことを発見した。すなわち、何かの場所を選び、記憶しておきたい物のイメージを心に思い描き、それをそれぞれの場所に一つ一つ順番に置いていけばよい、と（Cicero [55 B. C.] [1902]1969=[1999]2005: 93-5; Assmann [1999]2006=2007: 50-1; Weinrich 1997=1999: 26-8）。

1.1.5 忘却を求めて

その記憶術の大家――シモニデス――が、ある時アテネの政治家テミストクレスを訪ねその「術」を教

授しようと申し出たところ、かの政治家は次のように答えたという。「記憶する術を教えてくれるよりは、忘れたいと思うことを忘れる術を教えてくれるほうが自分には遥(はる)かにありがたいことだ」と。これもキケロ『弁論家について』が伝えるエピソードである(Cicero [55 B. C.][1902]1969=[1999]2005: 61-2)。

1.1.6　初心を忘れる――制度的忘却

M. アルヴァクス（1877-1945）は、集合的記憶――いかなる個人的想起も社会的枠組に依拠している――概念を発展させた、記憶研究の先駆者の一人である（Erll 2017=2022: 36-7）[1)]。その彼と並び得た可能性があったにもかかわらず、そうならなかった同時代人にF. バートレット(1886-1969)がいる。

イギリスの心理学者F. バートレットは、エビングハウス流の環境から切り離された実験室における記憶研究を批判し、個人の認知に対する社会や文化のダイナミックな関係を強調する（森 2022: 59)。このアイデアの源泉はW. H. R. リヴァースとA. C. ハッドンの二人の人類学者たちであった。前者からは、個人的感情や認知は社会形式によって制度化されるという考えを、後者からは認知の実験的研究は慣習化に焦点を当てるべきという考えを受け継いだ(Douglas 1987: 83-4)[2)]。その後、N. ウィーナーからの助言を得、F. バートレットは系列再生法を考案した。イギリス人被験者らは馴染みの薄い異文化の民話を次々に伝達することを求められた。伝達を繰り返す中で、物語は単純化され、平凡なものとなり、最終的にはイギリス民話のようになってしまった。F. バートレットによれば――M. アルヴァックスに賛同しつつ――、想起とは再現ではなく、スキーマ――経験を組織化することで記憶能力を高める認知的枠組――を通じた構成的活動なのである(Schwartz 2016: 17-8; Olick et al. 2011: 21; Erll 2017=2022: 105; 森 2022: 57-62)。

しかし、この実験は被験者から社会的次元が剥奪されるようデザインされており、それゆえ被験者は、情報を単純な図式に落とし込む認知的しみったれとして振る舞うこととなった（Douglas 1987: 88; Schwartz 2016: 18)。F. バートレットはW. H. R. リヴァースからアイデアを受け継ぎ「制度が認知に与える影響を研究するつもりであった。……当時の思考スタイルからすれば、制度的制約が現代人に大きな影響を与えることはありそうもないことであり、……バートレットが従事した実験環境では、制度的効果を捉えることはできなかった」(Douglas 1987: 81)[3)]。自身のアイデアを、当時の他のアイデアや研究実践に接続することができなかった――受け手が適切なスキーマを有していなかった――がゆえに、F. バートレットのアイデアは、忘却の海に落ち、再発見を待つことになったのである（Douglas 1987: 89; Erll 2017=2022: 106; 森 2022: 61)。

1.2　新しいアイデアの社会学における継承と忘却

先に掲げた6つの事例は、いずれも記憶、および想起と忘却に関わっている。記憶とは、心の奥にしまい込まれた過去のイメージを外界へ提示する個人的プロセスを指し、記銘、保持、想起の三つの段階からなる（Olick et al. 2011: 16; 鈴木 2016: 66)。想起とは、現在における過去の選択的再構成であり、忘却とは想起の際のミスや変化により、当該情報へのアクセスに困難が生じることである（Erll 2017=2022: 31, 148-9)。

議論を先取りするならば、記憶とは認識の集合的生産である。忘却に抗うための記憶術、記憶の方法は、

イメージ上の場所に分類軸を設定し、一覧性を打ち立てるが、その分類は他者たちとのコミュニケーションにおいてなされる。

なぜ記憶、想起、忘却なのか？

1980年代における、P. ノラ「記憶の場」論、アスマン夫妻「文化的記憶」概念などの登場は、社会や学問におけるメモリー・ブームを引き起こし、現在の学際的、国際的なメモリー・スタディーズに至っている(Erll 2017)。後述する本稿の議論の内容は、メモリー・スタディーズに含まれうるかもしれないが、記憶、想起、忘却への関心はより限定的な文脈に起因する。すなわち、C. キャミックとN. グロスによって提唱された新しいアイデアの社会学(Camic and Gross 2001)である。ではどのように、新しいアイデアの社会学と記憶、想起、忘却が関係しているのか。以下簡単に描き出しておこう[4)]。

1.2.1 正典化への問い

C. キャミックとN. グロスの新しいアイデアの社会学とは、集合的創造性の社会学の提唱である。すなわち、あるアイデアをローカルなネットワークに位置づけ、その生成、普及、消滅を明らかにしようとするものである(Camic and Gross 2001)。

ここで時計の針を進め、新しいアイデアの社会学を踏まえた近年の研究（Huebner 2014; Adler-Nissen and Kropp 2016)から、その特徴を押さえることにしよう[5)]。

D. ヒューブナー（2014）およびR. アドラー‐ニッセンとK. クロップ（2016）は、新しいアイデアの社会学を次のように定義する。それは知識生産をローカルな状況における協働的プロジェクトとして捉えようとするものである（Huebner 2014: 214-5; Adler-Nissen and Kropp 2016: 9)。この背後には、1970年代を一つの分水嶺とする知識社会学に対する捉え方がある。それ以前の知識生産集団の社会学に対し、1970年代以降の「新しい」知識社会学は、ローカルな制度的文脈において、研究者たちがいかにして自身の知的主張を正統なものとしているか、そのプロセスの民族誌的な経験的探究の道を切り開くこととなった(Huebner 2014: 6-7; Adler-Nissen and Kropp 2016: 5, 9)。

「知識は自動生成、自動普及するのではない。……私たちは社会的活動の連鎖を追わねばならない」(Huebner 2014: 215)。「新しい科学社会学と知識社会学は、すべての知識は他の知識との関連において生み出されることを強調する。……それゆえ、私たちは社会科学的知識を、象徴的、言語的、社会的文脈と関連する歴史的生産物として分析する必要がある」(Adler-Nissen and Kropp 2016: 10　強調は著者)。

この時、すでに一定の評価を得ている偉大な個人や古典を取り上げ、その特性を探究しようとするアプローチには次のような問題がある。すなわち、「他の人々を排除することで、結局は社会的行為の複雑な連鎖を分析するための手っ取り早い方法として作用する。この意味で、[先のアプローチは]ある種の遡及的目的論的説明を招く。すなわち、諸特性、文脈またはメカニズムにおける多少なりとも明白な創造の瞬間に現在から遡ることで関連性を記述する」(Huebner 2014: 213　[　]内は著者による補足)[6)]。

歴史的行為は、現在の知識を単に過去に適用することによっては説明できない。なぜなら社会的活動の連鎖および当事者による理解には、複数の可能性があるからである。それゆえ、現在の状況から長期の言説に及ぶ複合的な時間的広がり(multiple temporality)の中で、知識の発展を解明しなければならな

い(Huebner 2014: 10)。D. ヒューブナーはそのための調査上のコツをいくつか挙げている。

第一は、**禁止語**である。つまり、社会的プロセスを説明するための分析上の近道として、例えば、「社会的構築」などのラベルを使用しないこと。このような安易なラベルの使用は、プロセスをブラックボックス化し、経験的研究の道を閉ざしてしまうからである(Huebner 2014: 10-1)。

第二は、知識生産を経験的な発展、継続、崩壊を伴う社会的対話として捉え直す際、アクターたちが合流し分岐する「**瞬間**」に着目すること (Huebner 2014: 217)。さらに言えば、ローカルな制度的状況における些細な変化が、受容にとって大きな帰結をもたらす**経路依存**の視点(Huebner 2014: 4-5)。

そして第三に、**正典化** (canonization)、すなわち当人および他の研究者が、知的評判を表明し、付与する過程への視点である (Huebner 2014: 11)。例えば、哲学者G. H. ミードが社会学の古典となる過程には、さまざまな人々が関与し、そこには無視され、忘れられ、周縁化されたG. H. ミード理解も含まれている(Huebner 2014: 218)[7]。

ここで正典化に限定し論をすすめよう。正典化とは評判獲得のプロセスであると同時に、忘却の探究でもありうる。さらに誤解を恐れずに言えば、その議論は、社会的活動の連鎖の重要な構成要素の一部として、ドキュメント(documents)を位置づけるという発想に基づいている[8]。書かれたものという意味でのドキュメントは、単なる記録ではない。

> ドキュメントは、それらを生み出し、扱う社会的行為者たちの有意味な行為として理解できる。……どのように、なぜ、誰によって、いかなる状況で、何に対し、何のために、ドキュメントが生み出されたのか。……さらに、ドキュメントは行為連鎖を媒介し、組織化することで行為の自己構造化の一因となる。……相対的な長期耐久性と広範な可動性により、つながりを明確にし、ローカルな状況における社会的実践間の差を埋めることができる。(Huebner 2014: 14-5)

ドキュメントの例を新しいアイデアの社会学の系譜から引用しておこう。表1はR. アドラー＝ニッセンとK. クロップによる知識社会学の四原則である。

1.2.2　表の発見的機能

表の内容の検討に入る前に、前景と後景を逆にし (Abbott 2004: 140-1)、表の機能について押さえておこう。この逆転は、言い換えれば、対象と観察者との間に「隔たり」を設けることに他ならない。そしてこの隔たりが、「同じ人間だから」、「同時代人だから」という理由で差異を解消し、自身の知識を対象に投影し理解する時代錯誤への警戒をもたらす[9]。

ドキュメントとは、「後代の読者が異なる歴史上の必要に迫られてそのテクストから読み取ったさまざまな意味を記録」(McKenzie [1986]1999＝2003: 228) したものであり、その形状は受容プロセスに作用する (McKenzie [1986]1999＝2003: 217)。つまり、形状は読まれ方をある程度構造化すると言ってよい。形状についての反省は、提示された構造を相対化し、潜在化した可能性を回復するのに役立つ。

J. グディによれば、「リストに配列することは、あるものを採り入れ、あるものは除外するということを含んでいるために、それ自体ひとつの分類様式」(Goody 1977＝1986：193)である。リストは、広範

な文脈から特定の項目を切り離し、物理的位置を与えることで、整理秩序づける。要するにリストとは境界を設定することであり、連続性よりは非連続性に依存している（Goody 1977=1986: 150-1）。それゆえ、情報提示の効率性を内容の統合性と取り違えてはならない。

リストの集合としての表は、ある特徴的な認識を惹起する。つまり「空白の嫌悪」（Goody 1977＝1986：289）である。それゆえ、リストは、発見的（heuristic）機能をもつ。なぜなら、空白や「表の構成は、対立や対比、類似、矛盾などの性質に関して疑問を生ませることがありうる」（Goody 1977=1986: 191）からである。

1.2.3 「空白」を読む

以上をふまえるなら、表1における緊張関係を読み取ることができる。

表1 R. アドラー - ニッセンとK. クロップの知識社会学の四原則

出典：（Adler-Nissen and Kropp 2016: 12）

	（1）対称性	（2）内 / 外区分の拒否	（3）状況依存性	（4）文脈主義
焦点	科学的知識の盛衰を説明する際の不偏性の確保および目的論的説明の回避	社会的−政治経済環境	状況依存性、局所過程、ミクロ相互作用	ある空間に位置づけられた異なる知識形態間の相互作用および関係
具体例	N. マクラフリン（1998）のE. フロムの新フロイト主義の盛衰に関する研究	ドイツ哲学およびワイマール期社会の反映としてのM．ハイデガーの思想に関するP. ブルデュー（1991）の研究	アメリカ社会学における3つの学派の制度化に関するC. キャミック(1995)の研究	アメリカとフランスにおけるJ. デリダ受容に関するM．ラモン（1987）の研究
主要な問い	(a) なぜ私たちは、ある科学研究を他のものよりも正しいまたは独創的だと考えるのか	(c)「非学術的」資源、素材、視点およびアイデアは、いかにして科学的成果およびプロセスを変容させる / によって変容させられるのか	(e) 知識はどこで、誰によって、いかなる制度の下で生み出されるのか	(g) 科学的成果が生み出される学術環境とは何か、またそれらは他の学術成果とどのように関係しているのか
	(b) なぜある理論的、経験的研究は学界に普及した後に忘れられ、一方、別の研究は後になってやっと認められるのか	(d)	(f) ローカルな認識論的状況、連携と対立、師弟関係、キャリア戦略などが知識生産にどのように影響するか	(h) ある認識論的共同体において、何が可能で、正統で、興味深い調査上の問い / 結論として受け入れられるのか

※具体例に出版年を追記。主要な問いにa ～ hの英文字を追記。

まず(3) 状況依存性と (4) 文脈主義の類似と重複が目に付く。重複を厭わずまとめるなら、これらの原則は、限られたローカルな状況における知識生産を問うものであり（e、g)、具体的には、ある学問分野で複数ある諸研究の内、何が正統とされるのか(a、h)、または逆に忘却されるのか(b)を、師弟関係、連携と対立、キャリア戦略などから明らかにしようとするものである(f)。

これらの原則に対し、(2) 内／外区分の拒否の原則は、ローカルな状況を所与とした上で、「非学術的」資源が、知識生産に与える影響を捉えようとしている（c)。よって、原則（2）は、他と対立していることが読み取れる。

とするならば、これらの四原則は、新しいアイデアの社会学を遂行する上で、満たすべき要件、研究を導く方法上の規範というより(そうであるなら、少なからず重複や対立に敏感になっていたはずである)、むしろ具体例に挙げられた諸研究をまとめたリストの集合としての意味合いが強い。そこで、原則(2)の列と具体例の行に強調を施すと、P．ブルデューさらに(d)の空白が浮かび上がる。

ここではまず彼女らの沈黙、言落し、に着目しよう。議論を先取りすれば、空白には二重の意味を読み取ることができる。空欄(d)には、(c)の問いを具体化したものとして、例えば、次のような問いもありえたはずである。「学術界における支配者と新参者の闘争により、いかにして非学術界からの自律性を獲得するのか／喪失するのか」。しかし、そのような問いはなされなかった。

2000年以降、N. グロスは知識生産の原因を闘争のみに求めることを批判し(Gross 2003: 102)、C. キャミックは学術分野を所与とせず、研究者の参入プロセスを追うことを提唱するに至る（Camic 2020: 33-4)。R．アドラー＝ニッセンとK．クロップの沈黙は、結果として新しいアイデアの社会学における方法論的反省と親和的であったといえよう。確かに、1990年代初めには、学術界／非学術界の枠組みに基づく先駆的研究があったが、その後の新しいアイデアの社会学の趨勢としては、そちらは主流とならず、上述のようにローカルな状況における正統化および忘却を問う方向へ進んだのである。これが第一の意味である。

正確に言えば、ローカルな状況とマクロな非学術界の関係から知識生産・変化を捉えようとした研究は存在した。もしP．ブルデューでなかったとするならば、ミクロとマクロの両方を視野に収めた研究として、いかなる可能性を選択しえたのか。反実仮想（Abbott 2004: 149; Swedberg 2014: 113）により、例えば、R．コリンズ(1998)を挙げることができよう[10]。では、R．コリンズではなく、実際にはP．ブルデューが選択されたことにより、潜在化した可能性とはいかなるものであったのか。氏川（2023）で明らかにしたように、それは史料批判の問題である。R．コリンズは「平明なテクスト」という態度をとるため、観察者と当事者の区別にあまり注意を払わない。それゆえ、彼の議論は時代錯誤の危険性を伴うと書評者たちから批判を受けたのであった[11]。R．コリンズではなくP．ブルデューが選択された結果、これらの問題提起も潜在化してしまった。これが空白の第二の意味である。

新しいアイデアの社会学も正典化を免れ得ない。受容の過程で、ある論点が原則に格上げされ、別の論点は潜在化し、やがて忘却される。この時、ドキュメントの形状は読まれ方をある程度構造化することで受容プロセスに作用するのである[12]。

1.3　歴史意識の現場としてのドキュメント

「ある学問的業績は、他の研究者にどのように利用されるのかによって、関連があり、重要で、本質的であると考えられていること(もちろん、その逆も)を示す」（Huebner 2014: 217)。とするならば、新しいアイデアの社会学も一枚岩ではない。すべての論点が順調に継承、発展したのではなく、対立や断絶により、一部の論点は潜在化し現在に至る。

個人／社会の二項対立を批判し、偉大さを所与とせず、当時のローカルな状況における協働プロジェクトとして知識を捉えようとする新しいアイデアの社会学の試みは、「ある研究者の意味、意図、成功

を理解するために、無名の研究者、周辺的地位、長らく忘却された視点」（Adler-Nissen and Kropp 2016: 10）をも考察範囲に含めることを要求する。この時、複数の可能性をどのように区切り、つなげ、読むか（Emirbayer 1997; Desmond 2014; 氏川 2023）、すなわち「事例化 casing」（Ragin 1992: 218）が方法上の課題として浮上する。

先に取り上げた一部の動向は、正典化――記憶／忘却のプロセス――によって、この課題に対応する試みと見ていいだろう。すなわち、ローカルな状況における知識生産を、ある学問分野で複数ある諸研究の内、何が正統とされ／忘却されるのかを、師弟関係、連携と対立、キャリア戦略、さらに非学術的要因などから、経路依存が起こる瞬間を明らかにするのである（Huebner 2014: 4-5; Adler-Nissen and Kropp 2016: 12）。

C. キャミック（1992）やR. コリンズ（1998）においても、記憶／忘却の自己強化過程の場として想定されていたのが、「サークル」や「学派」などのローカルな対面状況であった。この場において各メンバーはドメイン――各専門分野において蓄積された「記号体系の諸規則や手続きのまとまり」（Csikszentmihalyi 1996=2016: 31）――を用いて日々の仕事を行う。それは議論における可能性の空間――何か可能で、重要なのか等々――を提供する（Collins 1998: 74）。

そしてドメインの一部はB. アーサーが「ディープ・クラフト」（Arthur 2009＝2011: 204）またはP. ブルデューが「将来を読み取る術」（Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 288）と呼ぶ暗黙裡に身体化された知識として存在する。よって、「古い問題を解決する過程で新しい問題を注意深く追究するためのノウハウを伝えたり、ある問題が結局は袋小路に陥りそうだと閃く経験的直感について説明したりすることは、より難しいこと」（Sennet 2008=2016: 136）なのである。

これらは可能性の空間における方向感覚に関する知識と言えるだろう。特定の場所に形成されるサークルや学派に参加することで、研究者のドメインがいかに変更され、どのような方向性を獲得するのかについて、C. キャミックは「祖先選択」、R. コリンズは「機会構造」の視点から考察したのである[13)]。

新しいアイデアの社会学が、ローカルな状況におけるドメイン変更を記憶／忘却の視点から捉えようとするならば、ディープ・クラフトを宿すローカルな状況がまさに問題となる。

「歴史的行為は、単なる現在の前提に基づく理解によっては説明できないだろう。その狙いは、現在の状況から長期の言説に及ぶ複合的な時間的広がりのなかで知識がいかに発展するかを示すやり方で諸行為をつなげ、または明確にすることである」（Huebner 2014: 10）。このため「逆向きの見方」（Collins 1998: 101）のように、研究者がアイデアを当時の文脈に差し戻して理解する場合、現在との距離が生じる。正確に言えば、そのような操作を通じて距離を自覚するに至る。この「現在から隔たった過去」という感覚を一先ず歴史意識と名付けよう。この歴史意識に基づき、さらにその一部をひっくり返し、遠くにあるものから、現在の視点から理解可能なモノへと反転させるのである（Certeau 1980=1987: 148-9）。このような民族学的隔離と反転の操作の結果、C. ギンズブルグが指摘するような、観察者のカテゴリーと当事者のカテゴリーとの間の緊張関係が発生する（Ginzburg 2012＝2016: 76）。

この緊張関係が先鋭化する現場がドキュメントである。なぜなら、社会的行為の研究は、しばしば歴史的ドキュメントを用いて遂行されるからである（Huebner 2014: 13）。R. コリンズの場合、二次文献

に対するナイーブさに由来する時代錯誤が批判されたのに対し、C. キャミックは、この歴史意識により自覚的であり、例えば、ある思想家が自身の仕事を回顧した自伝的証言は信頼できない記憶の場合もあり、実際の研究プロセスに関する第一の証拠として採用することは難しいとしている（Camic 1992: 423-4）[14]。つまり、当事者の証言だからといって鵜呑みにせず、それすらも他の証言・証拠群とのネットワークの中の位置を見定めて使用する立場の採用である。

このことからも史料批判については、未だに新しいアイデアの社会学の中でも共通見解が確立されているとはいいがたく、現在も開かれた問いになっているといってよい。

1.4　「禁止語」としての忘却――本稿の問い

少なからず問題が大きくなってしまった。以上の議論においては、近年の受容をそのままなぞるのではなく、新しいアイデアの社会学の知見を再帰的に適用し、その受容の過程で何が強調され、忘却されたのかまで含めて「問題化」（Alvesson and Sandberg 2013＝2023）した[15]。この方向性を押し進め、なぜアイデアの生成を記憶／忘却の視点から分析する必要があるのか、歴史意識をふまえた史料批判とはいかなることか等々、より根本的な問いを立てることもできよう。

しかしながら、以上の問いは些か著者の能力を超えている。それゆえ本稿の問いは、上述の近年の受容を受け入れた上で欠陥を補う「ギャップ・スポッティング」（Alvesson and Sandberg 2013＝2023）とならざるを得ない。新しいアイデアの社会学が、ローカルな状況におけるドメイン変更を記憶／忘却の視点から捉えようとするものならば、そこに先の「禁止語」（佐藤健二）の発想法を適用しようというのが本稿における試みである[16]。すなわち、ローカルな状況対する記憶／忘却という視点は、一体いかなる認識をもたらすのか。「想起することと同様に、忘却することは記憶に関する基本操作である。……忘却が基本であり、想起の方が例外である」（Erll 2017＝2022: 147）とするならば、特に注目すべきは忘却である。忘却の集合的創造をいかにしてとらえることができるのか。

この問いの糸口として、N. マクラフリン（1998）を挙げることができる。なぜなら、彼は対称性を徹底し、あるアイデアが集合的に普及するプロセスのみならず、集合的忘却を考察の俎上に載せた一例だからである。

本稿の立場を強いてあげるなら、それは方法論的な関心である。方法とは、一般的には、その指示に従えば、ある目標まで論理的に到達することを可能にする諸手続きのことを指す（Swedberg 2021: 2）。しかし、本稿における方法は、このような規範的なものではなく、発見的（heuristic）なものである。すなわち、問題解決の際に役立つちょっとしたコツを意味する（Becker 1998=2012; Abbott 2004）。事例化――区切り、つなげ、読む――に使用できるプロットの拡充を目指している[17]。

1.5　本稿の構成

本稿の構成は以下の通り。第2節では、柳田国男の記憶術のエピソードを素材に、集合的記憶について本稿なりの定義を行う。S. L. スターの「境界オブジェクト」概念を補助線として、集合的記憶の要点として共同想起、分散化された認知、選択的再構成、忘却の常態性を確認する。集合的記憶だけではな

く集合的忘却も社会学的説明を要する事象なのである。集合的忘却とは、冗長性の操作による経路依存の結果、過去の使用に制限がかかることに他ならない。第3節では、既存の社会学における集合的忘却研究をレビューし、その方法上の特徴をテンプレートとして再構成する。既存研究の問題はネットワークに焦点が当てられ時間性が軽視されている点にある。ゆえに経路依存を禁止語とすることが課題となる。第４節では、先のレビューの中にM．ラモンのデリダ論、N．マクラフリンのE．フロム論を位置づけ、その長短を明らかにする。N．マクラフリンの議論は冗長性の増大による忘却の先駆的議論なのである。最後の第５節では、以上の議論をまとめ、課題を示し結論とする。

2　集合的記憶／忘却――「カード・ボックス」から「ジャスのセッション」へ

2.1　集合的記憶――過去の集合的使用

2.1.1　メタファーとしての集合的記憶

記憶／忘却は日常語でもあり、それによりかかった分析は危うい。知的道具を無自覚に用いるなら、容易に時代錯誤へと陥るだろう。ここでの記憶／忘却とは、正確にいえば集合的記憶であり忘却に他ならない。集合的記憶とは、1980年代以降、複数の学問分野において生じた記憶への関心の高まり――メモリー・ブーム――の中において提示された諸概念の一つである（Erll 2017=2022: 28）[18]。記憶研究の領域は実に多様であり――神経から伝統まで――、それゆえ2000年前後から、その非中心性、非体系性が繰り返し指摘されてきた（Olick and Robbins 1998; Olick 1999b; Conway 2010; Olick 2007: 22; Olick et al. 2011; Tota and Hagen 2016）。同様に集合的記憶についても、極めて多様な記憶実践を単一の概念に無理矢理押し込める、その濫用が問題視されてきた（Olick et al. 2011: 35; Schwartz 2016: 9; Erll 2017=2022: 28, 120）。

まず集合的記憶とはメタファーであることを確認しておこう。それは個人的現象を集合レベルへと転用して理解するための方法である（Erll 2017=2022: 120）。G．レイコフとM．ジョンソンによれば、環境との相互作用から得られる経験を、一貫性のある構造をもつものとして見る時、私たちは経験を理解し、それに基づき活動する。そして他の経験を用いて、ある経験に構造を与えるものこそメタファーに他ならない。一般に新しいメタファーは、ある側面を際立たせたり、（それゆえ）同時に隠したりすることによって一つの経験領域を浮き彫りにする（Lakoff and Johnson 1980=1986）。

2.1.2　過去の集合的使用

発見術としてのメタファーは隠蔽術であり、さらに言えば忘却術でもありえる。では、メタファーとしての集合的記憶は、いかなる領域の発見＝隠蔽を可能にするのか。

本稿における集合的記憶とは、ある現在における過去の集合的な使用である。つまり、ある状況におけるプロセス（Olick and Robbins 1998: 122）であり、その中で私たちは様々な方法を用いて「過去を再構成し、喪失し、取り戻す」（Bowker 2005: 2）。これには少人数での想い出話（Middleton and Edwars 1990）から、組織における知識の継承・忘却（Douglas 1987; Bowker and Star 1999）、そして国家単位の記念行事等（Olick 1999a）まで様々なレベルがありうる。

2.1.3　還元主義批判

議論を進める前に、この集合的記憶の定義が（暗に）持つ傾向を切断しておこう。J. オーリックとJ. ロビンズ（1998）のレビューが示すように、私たちはすでに集合的記憶研究の一定の蓄積からなるアーカイヴを有する。J. ボウカーによれば、**アーカイヴ**とは記録保管の構造であり、私たちが過去について考えるための道具である。それは一見、あらゆる可能な言明のセットとして自身を提示するが、特定の物事を記憶し、他を忘却する。この排他性が時間の単位や形式の共有を生み出し、効果的なコミュニケーションを可能にする（Bowker 2005: 10-8）[19]。

集合的記憶「論」の傾向として①**現在主義（presentism）**：しばしば現在における過去の構築が強調され、②流動的な過去のイメージ：解釈が分かれるテーマや人々がいかに過去を誤るかを語ることが多い（Schwartz 2016: 19）。③国家的アイデンティティの形成をめぐる人々の争いに焦点が当てられる（Olick and Robbins 1998: 128; Olick 1999a: 381; Schwartz 2016: 10, 19）。④方法論的ナショナリズム：分析枠組みが、特定の国家の過去に由来し、形成される（Tota and Hagen 2016: 2; Erll 2017=2022: 154）。⑤**還元主義**：以上の記憶実践の変化の要因を、その外部――例えば、政治文化や構造――に求めようとする（Olick and Robbins 1998: 130）。

ここでは特に還元主義に注意を払い、改めて集合的記憶をローカルな使用の状況に位置づけて捉えるならば（Collins 1998; Camic and Gross 2001）、その過去の集合的使用の含意とは一体いかなるものか。ここで記憶に関する回想を一つの導き糸にしたい。

2.2　柳田国男の記憶術――トポス的知による時間性の回復

2.2.1　コミュニケーションの中の記憶

> 先生の内部には、意地悪といっては言いすぎかもしれぬが、相手の無知、あるいはとぼけさ加減をからかって楽しむようなところがあったように思う。初対面の人には必ずお国はどこですか、と聞く。何々県何々郡何々村だって、そんならば、あの村はずれの何々神社には大きなクスの木があったね。〆縄がしてある、あの木は今もありますかね。そしてその横に小さな祠、いや正面じゃないよ、木の横の小さいの、あれはずいぶんいたんでいたが今どうなっていますかね、などという。聞かれた方はクスの巨木の存在すら忘れていて、一本とられるという順序である。（桑原 [1962]1980: 362-3）

柳田国男には、その驚異的な記憶力に関するエピソードがいくつか残されている。大藤時彦も「はじめての訪問者にその郷国を尋ねられ、どんな辺鄙な土地でもそこへ至る道筋や附近の地理をあげて質問せられるのに驚かぬ者はなかった」（大藤 [1962]1973: 93）と柳田の記憶力について回想している。ここで着目したいのは、柳田の記憶力の陰に、ともすれば隠れてしまう聞き手の「一本取られる」、または「驚き」という反応である。

当時から柳田の記憶力は「カード・ボックス」のメタファーにより語られていた（竹田 1984: 73）。また佐藤健二（1987）も、最晩年の柳田国男を訪ねた中野重治の回想を手がかりに、ともすれば「無意識のう

ちに語られぬ層に追いやられ」（佐藤 1987: 8）る、この碩学の晩年――同じ話の繰り返し――に「方法の運動の、原点を象徴する問い」（佐藤 1987: 9）を見出している。すなわち、日本地図という大枠の中に、相手の出身地を問い、関連づけてゆく実践は、「研究者という主体と、民俗という対象とを、分類して蓄積する、いわば生きた『カード・ボックス』……。……『記憶蓄積システム』でもあり、……知識と人の蓄積を動かすための手つづき、データ通信のプロトコルだったのではないか」（佐藤 2015: 10-1）。

ここでもまた過去を想起する際の「型」を対象化し切断しておこう。なるほど、メタファーにより記憶力をカード・ボックスというモノに譬えることで、柳田の記憶実践における、許容量、安定性、体系性、即応性などの諸側面に光を当てることができる。しかし、上述のようにメタファーは忘却術とするならば、このメタファーは柳田の記憶実践を、あくまで一個人の能力として構造化するに過ぎない。この裏で彼の記憶実践が内包するダイナミズムの後景化が進行する。具体的に言えば、以下の民俗学者の竹田旦の引用後半部が示すような、「対話術としての記憶術」という側面である。

> 当時、先生の頭の中には百以上の抽出しがあると噂された。実にさまざまな問題がきちんと整理して記憶されており、必要に応じて立ちどころに抽きだされるというわけである。……。あるいは、先生はみずから歩きもした土地を確認し、そしてそこにどんな民俗事象が伝えられ、誰が何を研究しているか、といったことを思い描きながら話し合いに臨んだのではなかったろうか。とすると、それは柳田先生の楽しい研究法であったにちがいない。（竹田 1984: 73）

2.2.2　身体という記憶術――場所とイメージ

コミュニケーションのなかに記憶実践を位置づけることの幾つかの帰結を、別のエピソードをもとに明らかにしていこう。和歌森太郎を介し、木曜会に初参加した際、竹田は柳田から以下のように声をかけられた。

> 「竹田君、君の出身は？」
> 「はい、愛知県です」
> 「愛知のどこ？」
> 「知多半島です」
> 「すると、『半田・亀崎、女のよばい、男極楽、寝て待ちる』、その半田・亀崎あたりかね？」
> 「はい、近くですが……」（竹田 1984: 70）

緊張の中、柳田から発せられた思わぬ「言葉（よばい）」に、竹田は少なからず狼狽するも、同時に民俗学の不思議な世界に魅入られてゆく。

> 翌月、和歌森先生に頼んで、また木曜会に連れていってもらった。……例によって、新人に柳田先生から声が掛けられた。私の顔に目を止め、

「君は。たしか半田・亀崎、女の……」

「はい、その近く、知多半島の出身です。竹田と言います。」

……このとき、私にひらめくものがあった。……人の名を出身の地名と結びつけて憶え、しかもそれを繰り返しては確認する、というのが柳田式記憶術のしくみだと気づいたのである。（竹田 1984: 71）

その後、竹田は1948年より民間伝承の会の機関誌『民間伝承』の編集を手伝うこととなり、その仕事の傍ら柳田式記憶術が幾度となく繰り返される状況を目撃することとなる。常に新人・客人に出身地を尋ね、予定に先立ち、時には10 ～ 20分も会話が続くことがあった。あまりの長さに、柳田先生の「新人（あらびと）好み」が始まったと、陰口をたたく者もいたという（竹田 1984: 72-3）。

柳田の驚異の記憶力は、ある「術」に裏打ちされたものである。それは、古代レトリックにおける記憶術、I. カントの記憶術、A. ルリヤが報告している記憶術と同様、**場所とイメージ**を結びつけるという方法である。近年の集合的記憶論においては、記憶実践におけるモノ、メディア技術の重要性が指摘されている（Conway 2010: 443; Olick et al. 2011: 6; Tota and Hagen 2016: 5）。この観点を補助線に場所とイメージの記憶術の含意を敷衍していこう。

第一は、メディアとしての自他の身体の利用である。先の記憶術は外部記憶装置としての他者に依存している。私たちは紙、写真、ICレコーダー、ビデオ等の記録媒体または素材自体をデザインすることにより「必要な情報を実世界自体に置く」（Norman 2011=2011: 73）が、日々交流する他者もまた豊富な記憶を宿し、影響力を及ぼす存在である（Jedlowski 2001: 31; Harris et al. 2010: 275）。「実際、他人は私たち自身よりも過去のある部分にアクセスしやすく、それゆえ私たちが忘れてしまった人や出来事を思い出す手助けをする」（Zerubavel 1996: 285）[20]。とするならば、上述の「新人好み」という陰口も、柳田にとっては自身のデータベースを更新する機会であったと見ることができよう。

また柳田自身の身体技法という点から見れば、注目すべきはリズムとテンポの利用である。「匂い、感情、動き、音、知覚などの記憶は、刺激―貯蔵―再現といった直線的な広がりというより、むしろ同期した連想が振動しあうネットワーク」（Draaisma [1995]2000＝2003: 206）である。つまり、単に人名と地名を機械的に結びつけるのではなく、「半田・亀崎、女の……」と「民謡の冒頭の一節」（竹田 1984: 72）を口ずさみながら記憶する。その身体化された民謡のリズムは、二度目の会合の際、竹田の姿から名前を思い出す際の、一種の検索装置として機能している[21]。まさに「身体という記憶術（ムネモニクス）」（Connerton 1989=2011: 132）である。

第二は、問うという半ば構造化された実践である（氏川 2023: 177-8）。先の桑原や大藤、竹田のエピソードからも分かるように、柳田の記憶術は問答というダイナミズムを通じた実践である。問うこととは、**話し手にとって不明な情報を、聞き手に要求する活動**である。それは協働的活動であり、他者を必要とし、依存する。それゆえ問うことはデザインを必要とする。なぜなら、問いは様々な応答可能性に開かれているからであり、他のではなくある特定の応答を相手から引き出すように方向付けねばならない（Ehrlich and Freed 2010: 6; Heritage 2010: 51）。

柳田の場合、問いのデザインのために選ばれたのは「地名」であった。「地理的な場所は人間の生活と経

験の形式を決定づけ、人間の生活と経験の形式は、その伝統と歴史をこの場所に刻印する」(Assmann [1999]2006=2007: 367)。それゆえ、地名をスキーマ(F. バートレット)とした問答は、初対面の人にとっても馴染みやすいものであり、互いの問答がさらなる問いを生み出す「**相互キューイング interactive cueing**」(Harris et al. 2010: 274; Erll 2017=2022: 112) へとつながりやすい。この点からすれば、桑原の「一本取られる」(桑原 [1962]1980: 363) ということも、問答によって得られた忘却の想起として、個人のミスとしてではなく、共同作業の達成として積極的に評価できよう。「『私が忘れる』ことは『私たちが忘れる』ことを意味しない」(Harris et al. 2010: 275)のである。

2.2.3 境界オブジェクト

誤解を恐れずに言えば、「野生の記憶術 mnemonics in wild」としての地名は、情報を分類・整理するスキーマに留まらず、他者との共同を可能にする仕組み、すなわち「**境界オブジェクト boundary object**」(Star and Griesemer 1989; Bowker and Star 1999; Star 2010) として見ることができる。境界オブジェクトとは、「異なるグループが、合意なしに協働することを可能にする取り決め(arrangement)の一種である」(Star 2010: 602)。すなわち、合意を欠く、または脆弱な状況下においても、人々の協力関係は可能である。では、それは一体いかにして可能かという問いに答えるために提示されたのが境界オブジェクト概念に他ならない (Star and Griesemer 1989: 388; Bowker and Star 1999: 296; Star 2010: 604)[22)]。それは、局所的ニーズに適応しうる十分な可塑性を持ちながらも、境界を越えて移動しても一定のアイデンティティを維持しうるものである。曖昧さと恒常性を兼ね備えるがゆえに各領域をつなぐ翻訳の手段となる(Star and Griesemer 1989: 393; Bowker and Star 1999: 16, 297)。

例えば、S. L. スターとJ. R. グリーゼマーは、カリフォルニア大学バークレー校の動物博物館の事例を次のように考察している。博物館は異なる諸領域が交錯しており複数のビジョンを内包していた。すなわち、動物学者、アマチュア研究者 (コレクター)、後援組織、慈善団体、自然保護活動家、大学運営者、剥製師、そして動物たちである。動物学者の関心はダーウィン理論の精緻化——進化における環境因の解明——であった。後援組織にとって博物館は、自然保護と慈善活動のための場であった。アマチュア研究者の関心は、各標本が科学的な意味を持つように無傷で、腐敗しないように保存すること、猟師の関心は高く売れる動物を狩ることであった。そして大学運営者にとって博物館は、地域文化センター(およびそれに由来する名声)として位置づけられていた。

博物館が科学的使命を実現するには、特定の場所、時期における、長期の動物種標本を必要とした。そのため、異なるアクターによって生産された情報を「規律づける」ための明確な方法、すなわち標準化された方法が開発された。これはアマチュアも学ぶことができ、同時にアマチュアが取集した情報を専門家が分析することを可能にした。標準化により後世の研究者や遠隔の研究者に一貫した情報を提供することが可能になったのである。さらに、博物館に関る共同作業の交差が、複数の領域にまたがり、かつ各領域のニーズを満たす境界オブジェクトを生み出す——標本、フィールドノート、地図、博物館。この結果、自然を保護し、自然の多様性を整然と並べるという目標を、異なる世界で共有することが可能になったのである(Star and Griesemer 1989: 396-409)。

極めて大雑把にまとめるなら、境界オブジェクトとは、諸領域を流通し、連携を可能にする融通無碍

なものと言えよう。この概念の提唱者の一人であるS. L. スターは、境界オブジェクトは「物質的であり過程的でもある」(Star 2010: 604)ことを強調している。

ここでいう「オブジェクト」とは、物質的実体という意味に加え、コンピュータ科学的意味およびプラグマティズム的意味が担わされている(Star 2010: 603)[23]。まず後者から説明していこう。つまり、物質性(materiality)は使用の結果という立場である(Bowker and Star 1999: 290, 293; Star 2010: 603)。さらに言えば、その使用はローカルな実践共同体に埋め込まれたものである。それゆえ、「何が境界オブジェクトである／ない」は経験的調査に先立って判明するものではなく、「状況による」としか答えられない(Star 2010: 612-3)。

先に諸領域、グループ、そして実践共同体と互換的に使用して来たが、それらは、G. C. ボウカーとS. L. スターによれば、諸目的を達成するための協働で作業する人々の集合である。人は一連の活動のなかに参加し、実際に何とかやってゆく方法を習得することで当該共同体のメンバーになる。それは同時に各種の道具――モノ――の使い方を学習するプロセスであり、習熟するにつれ当初の奇妙さが自然なものとなってゆく(Bowker and Star 1999: 294-5)[24]。

そして2つ以上の実践共同体の境界においては、上述の「自然さ」が脅かされることとなる、この問題を解決するために、各種の調整作業(articulation)――「予期せぬ事態に直面したときに物事を軌道に戻す、予期せぬ偶発性に対応するために行動を修正する作業」(Bowker and Star 1999: 310)――、すなわち、「即興と制約への順応のバランス」(Bowker and Star 1999: 294)が必要となる。実践共同体のあいだの持続的協力から生まれる、自然化の異常を解決するための作業上の取り決め。それが境界オブジェクトに他ならない(Bowker and Star 1999: 297)。コンピュータ科学におけるオブジェクトとは、データと手続きのカプセル化を意味するとすれば、境界オブジェクトには、単なる物資的対象のみならず、それが使用される実践共同体における使用法も刻印されているのである。

境界オブジェクトの使用範囲が拡大するにつれ標準化され、それは方法論的基準などへと変化する(Star 2010: 605)[25]。

2.2.4　トポス的知――方法としての地名

議論を元に戻そう。先に地名を、経験的裏づけなしに、境界オブジェクトに含めてしまったが、地名は柳田にとってまさに異質な主体が交錯するある種の「場」として構想されていたからに他ならない。「地名の話」([1933]1998)において柳田は、地名を「一種の言語芸術」(柳田 [1933]1998: 14)として捉える[26]。そして日本には驚くほど地名が多く、その変化が盛んである点を強調する(柳田 [1933]1998: 9)。この膨大な情報を前に、一つの方法が必要であると言う。それは「人が土地に名をつけようとした本の心持」(柳田 [1993]1998: 12)を踏まえたものである。「使用者の要求をも代表せず、群の生活にも相応せぬ地名は、記憶せられて永く残る資格が無かった」(柳田 [1933]1998: 19)。とするならば、その方法は、地名の冗長性を利用し、比較を通じて「日本人の昔の生活」(柳田 [1933]1998: 11)に迫るものである。例えば、ある特定地域の地名が、その後、広く拡散し、元の場所が現在不明になった場合。諸国に散らばる当該地名の特徴をカードに移し、重ね合わせ、比較することで原点が推測される(柳田 [1933]1998: 15, 22)。「丹念な分類さえして見れば、事実の把握はさう難事でない」(柳田 [1933]1998: 23)。それゆえ、「個々の

地形名詞それ自身に、各々其歴史を語らせることも不可能では無いのである」(柳田 [1933]1998: 24)[27]。

「或一つの時代の横断面には新旧年齢の極めて区々なる、命名の趣旨の最も著しく相違した地名が、入組んで頭を出して居る」(柳田 [1933]1998: 23)。すなわち「大地の表面は隅から隅まで、悉く人類去来の足跡」(柳田 [1933]1998: 28) である。それゆえ、地名とは、単に物理的地形に貼られた識別ラベルではなく、当時の人々の生活のなかでの命名／使用の痕跡を宿す、重層的な厚みを持った方法史といってよい。誤解を恐れずに言えば、地名とはアーカイヴの別名に他ならない。アーカイヴは「特定の事実／発見／観察すべてを、そしてそれだけを記憶することで、一貫して積極的に他の物事を忘却する」(Bowker 2005: 12)。

であればこそ、対話の場における、問いの構造化として地名を採用することは、柳田の歴史社会学 (佐藤 2015)を実践する上での戦略、すなわち「方法としての地名」として見ることができる。

地名への問いは、第一に、過去へのアクセス・キーに他ならない。「ある種の分類システムを通じてでなければ、過去にアクセスすることはできない」(Bowker and Star 1999: 41)[28]。分類システムを通じた選択の結果、「同期化 synchronization」(Bowker 2005)が実現する。

> 記憶の最初の仕事は、実は出来事の保存ではなく、既知のカテゴリー……にそのデータや出来事を組み込むことを可能にする、重要と思われるいくつかの側面を選び出し、その他は忘れることである。結局、記憶とは時間からの独立をもたらす……。まさに、出来事から時間を排除することによって、記憶はそれらを同期させ、想起し、予期し、予測し、再構成することができる。(Esposito 2008: 185)

例えば、上述の竹田は、柳田の「地名とその土地に関する知識欲はきわめて旺盛であった」(竹田 1984: 73)ことを回想している。多少長くなるが該当箇所を引用しておこう。

> 柳田先生が会合の席で、地名について、ことさら発言する場合も珍しくなかった。ある日、
>
> 「民俗学を志している者ならば、県名・国名をつけずに、郡名だけで会話ができなければいけないよ。北設楽といえば、ああ花祭の里だと、ぴんとこなくちゃ。むずかしいのはナカ郡だね。どことどこにあるか、みんな挙げてごらん。」
>
> との問い掛けがあった。先輩たちが次々と答えるのに私は聞耳を立てた。
>
> 「茨城県那珂郡と神奈川県の中郡……。」
>
> 「京都府にも中郡があります。丹後です。」
>
> 「島根県の那賀郡。」
>
> 「徳島県にも那賀郡、それと字は同じだが和歌山県の那賀郡はナガ郡と濁って発音しますね。三重県の名賀郡もナガです。」
>
> 「宮崎県には南那珂郡があります。」
>
> ここで答えがとぎれ柳田先生から解説が加えられた。ナカ郡はいろいろな漢字を宛てても元来は「中」で、国の中央に位置していることによる場合が多いこと、ナガはあるいは「長」の意味かもしれないが、

三重県の名賀郡は名張・伊賀両郡の合併で別物であること、等々懇切を極めた。さらにつづけて、

「南那珂郡にはもちろん北那珂郡もあったよ。明治二九年の改編で無くなってしまったけれどもね……。では、それ以前に存在したナカ郡を指摘してごらん。」

これには答えられる者がなかった。

「例の明治二九年の改編までは、武蔵と筑前にも那珂郡があり、伊豆には名賀郡があった。讃岐の仲多度郡も那珂郡と多度郡が合併したものだよ。近世にまで遡れば、中郡はあちこちにあったね。」

ここまでくると、全く柳田先生の独り舞台であった。しかも要所要所に、あそこは誰々の故郷、ここにはこんな文献があると、研究者や研究書がぽんぽんと出てきて、まことに壮大な解説であった。（竹田 1984: 73）

ここでの共同想起において、複数の情報が一覧的に並べられることで、比較が可能になり、さらにそこから同一のなかの差異を手がかりに、変容の背景考察に進むことが可能になる。

第二に、方法としての地名による得られるものとは「**トポス的知**」に他ならない。トポス的知の効果は、議論を先取りするならば、忘却の想起を通じての「深さ」の獲得、より具体的に言うならば**時間性**(temporality)**の回復**である。トポスとは場所を意味するギリシャ語であるが、古代レトリックにおいては、議論における論点や論法のセットおよびそれらを発見する技法を意味する。上村忠男は、G. ヴィーコ論において次のように説明している。すなわち、トポスとは「〈まなざし〉の知にほかならない。……みずからが対象とすることがらの構成要素全体の通覧ないし一挙的総覧によって成り立っている」（上村 1998: 53）からである。換言すれば、諸データを相互関係の点から観察し、連結項を発見しようとする俯瞰的叙述である。関連を知ることにより状況はより「深い」ものとなる（Wittgenstein 1967=1975: 404-17）[29]。

「記憶術の空間的な構造は、その本来の具体的な場所から引き離されて、見取り図や地図のように機能する」（Assmann [1999]2006=2007: 373）。例えば、中野重治は、かつて大間知篤三から聞いた柳田の記憶力のエピソードについて以下のように評している[30]。

晴れた日の（雨のあとの）昼に山を見るように、ひだなどがよく見えるままで明るい、ああいう性質のもの。（中野 [1955]1978: 126）

第三に、発想術としての記憶術である。地名への問いは、自身の記憶が正しいことを確認する機会ではなく、むしろ冗長性を高めることにあったと言えよう。その冗長性により、複数の情報を一覧して比較することが可能になり、アーカイヴ化される際に忘れ去られた記憶を回復する――過去を幻視する――ことができる[31]。冗長性を別の角度から見れば、自身と対象との間に「隔たり」を構築することに他ならない。そして、この隔たりが懐疑の基盤となるのである。その振る舞いは、場合によっては「相手の心肝を寒からしめるように突いて出る」（桑原 [1961]1980: 240）ことでもある。これが先の桑原武夫が「意地悪」と差し当たり名付けたもののもう一つの可能性ではなかったか。

とするならば、柳田の場合、地名による記憶術は発想術をも兼ねていたと言えよう。トポス的知をも

たらす共同想起の場は、意図しなかった重要なデータをそれとして把握する機会をもたらす「セレンディピティ状況」(Merton and Barber 2004: 261)でもあった[32)]。

2.2.5 集合的即興としての博覧強記

最後は、集合的即興(氏川 2023)である。誤解を恐れずに言えば、柳田の博覧強記は、集合的即興の産物に他ならない。すなわち、柳田の記憶術は、人とモノのハイブリッド(Latour 1987=1999)から成る一種の生態系のパフォーマンスの一部としてある。

方法(method)のギリシャ語の語源はmetà[後に] + hodòs[道]、つまり、人々が繰り返し往来した後に形成される痕跡、轍を意味する(Ginzburg 2016: i)。とするならば、「お国はどこ?」という問いは、「ルーティーンの中に埋め込まれて」(Sennett 2008=2016: 77)いた、柳田流の即興を支える記憶の身振りであった。それはジャズのセッションのごとき相互キューイングを生む合図と言えよう。ジャズの即興は、準備無しの行き当たりばったりではない。各参加者は馴染みのある曲、韻律、メロディ、ハーモニー、すなわちスタンダードを習得しており、相手の出方に合わせ、かつ相手が反応できるような次の自らの音を選び取ってゆく。一定の約束事が、いくつかの音楽主題を結びつけたり、結び変えたりすることを可能にする。そこでは演奏ミスでさえ、続く奏者によって上手くアレンジされ全体の一部に織り込まれてゆく(Schön 1983=2007: 57; Sawyer 2007=2009: 67-8, 220; Sennett 2008=2016: 402)。

博覧強記とは、柳田が他者と共に参加する集合的即興のパフォーマンスに付けられた名称とするならば、ある時期までの柳田は他者と積極的に交流していたからこそ、その記憶は常にアクティブな状態にあったと言えるだろう。ここに柳田の記憶力の秘訣がある[33)]。

以上のように、記憶をカード・ボックスとしてではなく、ジャズのセッションとして捉えるならば、記憶とは、心の中に蓄積されたイメージを検索して取り出すといったような単純な作業ではない。「現在の検索環境で利用可能な情報と記憶された情報が組み合わさり、私たちが『記憶』として経験する創発的活動パターンを生み出すのである」(Schacter 1995: 24)[34)]。その成功は、ある時は柳田の「博覧強記」としてあらわれ、別の機会には即興の失敗として、「一本取られた」、「訂正」として想起されるのである。つまり、忘れていたものを柳田とともに想起するという体験である。このような「忘却の身振り」(Casey 1992: 302)もまた集合的即興を支える一部であり、考察対象となりうる領域と言えよう。

とするならば、記憶/忘却という二項対立を前提に、柳田/周囲の人々を単純に重ね合わせることは些か性急に過ぎよう。柳田の博覧強記に関与した人々の後景化し、記憶実践のダイナミズムへの問いを予め閉ざしてしまうからである。もちろん、柳田自身が無謬ということはあり得ない。実際エピソードとして回想される機会は少ないものの、柳田の失敗もまたありえた[35)]。しかし、成功は記念されやすく、失敗は言及されることは少ない。博覧強記のエピソードのみが自己強化的に普及することは――**経路依存**――、柳田個人のみに記憶「力」を帰属させる一方、他方で柳田の記憶「術」、すなわち記憶の場を形成する社会的側面を後景化する効果をもってしまった。それは後述するように、柳田晩年の衰えに対比される形でますます先鋭化したのである。

柳田の記憶力のエピソードとは、ある口承文化についての書かれた記録であった。

2.3　集合的記憶／忘却――冗長性からの定義

少なからず議論が脇道にそれてしまった。元に戻し本節を締めくくろう。

本節の目的は、集合的記憶／忘却について、本稿なりの定義をすることであった。集合的記憶は、個人の記憶の社会的組織化、記憶を保持する人工物――図書館、博物館、記念碑、地名、そして個人自身が直接体験しなかった過去についてのイメージなど、多様な意味を持つ(Schudson 1995: 348)。

それに対し本稿では、集合的記憶を、ある現在における過去の集合的な使用として定義した。これまでの議論を踏まえ補足するならば、この使用には失敗および修正という再帰的プロセスも含まれる。このようなプラグマティズム的／関係的転回(Emirbayer 1997; Desmond 2014; 氏川 2023)の狙いは、記憶実践を個人の内部から外部へと拡張することにある。対象領域の拡大により、忘却もまた記憶実践の重要な要素として再定位される(Erll 2017=2022: 56)。

この拡大は必然的に記憶を論じる際のメタファーの変更を伴う。すなわち、カード・ボックスからジャズのセッションへ。これにより、「集合的」という表現で指示される現象に、どのような構造を与えることができるのか。柳田という個別事例から幾つか一般化できる要素を取り出しておこう。

第一に、**共同想起**である。想起は常に、他者たちの中で、他者たちと共に行われる（Zerubavel 1996: 283; Olick 1999b: 340; Jedlowski 2001: 30; Olick 2008: 156; Conway 2010: 443; Erll 2017=2022: 128; 森 2022: 46)。「記憶は外部の環境によって呼びかけられ、挑まれる。その環境を介して記憶は自らを確認する。この『記憶の環境……』が失われて押し黙ってしまうと、想起はその建設的な敵手を失い、幻影となる」（Assmann [1999]2006=2007: 196)。それゆえ、「想起とは、儀式化された身体的実践のシステム全体の中心となる精巧な行為」（Sullivan 1995: 391)なのである。

第二は、**分散化された認知**(Hutchins 1990, 2006)としての記憶である。想起は、他者たちと「いっしょに（together）行動する」（Becker [1963]1973=2011: 177）ことの中に埋め込まれているとすれば、それは実践共同体に偏在しつつ、一部重複する知識を、先行する他者の行為への反応として運用することに他ならない（Hutchins 1990: 208, 212-4)。それゆえ、「高度に拡散し、技術的に媒介された記憶が記憶実践の本質」（Bowker 2005: 15)なのである。

ここでの「集合的」は共有や総意と同義ではない(Schwartz 2016: 11)。B. シュワルツはこの点を強調しつつ、集合的記憶について以下のように定義している[36)]。

> 諸個人の過去に関する知識、信念、感情。どのように道徳的に過去を判断するか。どれだけ過去と一体化しているか。自身の行動やアイデンティティのモデルとして過去からどれほど影響を受けているかなどが、社会全体に分散(distribution)していること。(Schwartz 2016: 10)

一点補足するならば、分散化された記憶とは、問答プロセスにより構造化された**集合的即興**でもある。すなわち、共同想起の場においては、異なる因果系列の交差――危機――を識別し、対応する「調整作業」(Bowker and Star 1999: 310)が求められる。

第三に、**選択的再構成**である。上述のB. シュワルツの引用後半にもあるように、集合的記憶と

は、ある標準に基づく分類に他ならない。それは、「絶え間ない再カテゴリー化を実現する手続き的能力」(Esposito 2008: 185) であり、「分類と標準化を主要な機能とする様々な『技術的装置 dispositifs techniques』を通じ、記憶は現在において社会的に作動する」(Bowker 2005: 24)。選択的であることの強調は各文献に見られるが (Lang and Lang 1988; Shotter 1990; Douglas 1995; Schudson 1995; Jedlowski 2001; Kansteiner 2002; Assmann 2008; Conway 2010: Harris et al. 2010)、ここではその含意をいくつか確認しておこう。

①**レトリック的**：集合的記憶とは、過去をめぐる流動的な交渉プロセス (Olick 2008: 159) でもあるとすれば、メンバーらは正当化可能な説明を定式化する責任を負い、それはレトリックを用いて達成される (Shotter 1990: 134)。レトリックとは、知的資源を駆使し可能性の空間を構造化する知識や技法の総称に他ならない。レトリックを通じ相手の選択肢が制限されるのである(氏川 2022: 199)。

それゆえ、選択的再構成は完全に自由なものではなく、人とモノとの関係において制限されている[37]。「利用可能な過去、個人の選択、そして社会的対立の構造が、現在において過去のイメージを変えるための私たちの能力を制限している」(Olick 1999a: 381)[38]。

②**時間性**：選択的再構成は一度で完結しない。「それは常に現在から出発するため、想起の対象が呼び戻されるとき、その対象はずらされ、変形され、歪められ、再評価され、更新される」(Assmann [1999]2006=2007: 44)。再構成には時間が必要である。このことは、想起の対象は、複数の抵抗や失敗を経験すると言う意味で**キャリア**を持つということに他ならない (氏川 2023: 174)。それゆえ想起の対象が、作成、維持、修正、忘却される一連の**受容プロセス**を追わなければならない(Kansteiner 2002: 196; Conway 2010: 451)。

③**経路依存性**：そのプロセスを追う際の予断をここで切断しておこう。繰り返しになるが、集合的記憶論は、社会的状況が「虚偽につながる歪んだ視点を常に引き起こす」(Schwartz 2016: 17) との前提を無自覚に採用する場合が多い。確かに、過去をめぐる記憶の闘い (Zerubavel 1996: 295; Conway 2010: 443) においては、「記憶の歪曲」(Schudson 1995) が生じることもあろう。しかし、「ひとたび集団のなかで記憶が確立されると、それを無視することも、修正することも困難になる」(Schwartz 2016: 15) ということもまたありうる。つまり、経路依存性である (Olick 1999a: 382)。変化だけではなく、変わり続けないということもまた説明を要する事象である。ただし、偶有性にも十分な余地を残しておこう。経路依存は経路決定ではない(Olick 1999a: 383)[39]。

④**冗長性**(redundancy)：逆説的であるが、複数のバージョンが生産、流通するからこそ、かえってオリジナルが安定することがありうる。一定の時間幅のなかで受容されキャリアを持つことは、別の角度から見れば想起の対象は冗長性を持つということである。すなわち、「メッセージの『意味』は、いくつかのバージョンやキャリアのどれか一つにあるのではなく、すべてのバージョンとキャリアにある。……物語が多様であるほど、より正確に伝えられ記憶される。このような物語には、個人レベルでは曖昧だが、集合体としては一貫した情報の断片が含まれる」(Schwartz 2016: 13) からである。例えば、上述の柳田の記憶力も、複数のバージョンが残されていたからこそ、それらを再編することで別様の解釈を織りあげることが可能となったのである。

第四は**忘却の常態性**。もう一歩踏み込むならば先行性である（Assmann 2008）。「集合的記憶は、社会集団が自分たちの生活で起こった出来事の中から、重要で保存に値すると考えるものを選び出すことに関係している。必然的に、この規範的評価には忘却も含まれる。過去を処理する心の能力には限界があるため、過去のすべてを記憶できるわけではない」（Conway 2010: 443）。忘却とは記憶することに付随する残余カテゴリーや失敗などではなく、社会規範の一部である（Zerubavel 1996: 288; Assmann 2008: 97）。A. アスマンはさらに踏み込み、私たちは未来に向けて多くのことを忘れ続けなければならない。それゆえ、私たちは忘れることから始めなければならない点を強調する（Assmann 2008: 97）。

「忘却自体を伝承の過程における本質的な要素として考える」（Assmann [1999]2006=2007: 255）ことの研究上の帰結は考察範囲の拡大である。つまり、成功例だけではなく、失敗した集合的記憶もまた説明すべき現象である（Bowker and Star 1999: 256; Kansteiner 2002: 192-3; Conway 2010: 448-9）[40]。

要するに、本稿における集合的記憶とは、分散化された認知であり、異なる因果系列の交差に対応する即興である。この過去の記憶を作るプロセスにおいて、複数のバージョンが生み出され、改訂され、そして消失してゆく。この冗長性が時間性（temporality）を生み出す。「時間の要素が強まることで、忘却、不連続性、衰退、再構成という観点が前面に出される」（Assmann [1999]2006=2007: 198）。

集合的記憶／忘却は「時間的次元の重要性を認識する」（Jedlowski 2001: 30）。とするならば、複数の過去のバージョンを生み出しながらも／がゆえに、過去の記憶または忘却が成立しうるのは、いかにしてか。この経路依存と偶有性のバランスを開かれた問いとして掲げておこう。「それゆえ私たちは、その多様性、矛盾、ダイナミズムに敏感な分析ツールを必要としている」（Olick 2008: 159）。

このように集合的忘却を冗長性の点から捉えるのが本稿の立場である。議論を先取りすれば、忘却を冗長性の喪失としてのみ概念化することは些か性急に過ぎよう。冒頭のI. カントの「メモ」のエピソードにもあるように、冗長性の増大ゆえに忘れるということもまたあり得るからである（Connerton 2008: 64-7）。

では、社会学における集合的忘却を扱う先行研究において、この冗長性の増大／喪失はいかに概念化されてきたのか。冗長性という視点からの集合的忘却に関する方法史の再構成が次節の課題である。このアーカイヴの中にN. マクラフリンを位置づけることにより、その位置と限界を明らかにすることができる。

3　忘却の中の忘却

3.1　デジタル革命と規範としての忘却

メモリー・ブームの一因としてのメディア技術の発展――特にデジタル革命――は、私たちの日常生活における記憶装置の数を飛躍的に増加させた（Olick et al. 2011: 14; Erll 2017: 26）。極めて大雑把にまとめるなら、デジタル化とは、次のような特徴をもつ諸変化の複合体を指す。①即時性、②複製がほぼ完璧、③情報爆発（多くの情報の保管、データベース化）、④「検索」エンジンの重要性の高まり、⑤自動化／ブラックボックス化（Abelson et al. [2008]2020=2021: 18-32）。⑥最適化（与えられた問題の効

率的解決を優先)、⑦加速化(Reich et al. 2021=2022: 55)。デジタル化により、大量の情報をコンパクトに保存し、検索、利用できるようになる。これを別の角度から見れば、私たちは内容を失うことなく多くのことを忘れることができるようになった(Connerton 2008: 64; Esposito 2008: 188)。

デジタル化による記憶からの解放は、かえって忘却を主題化させる(Nourkova and Gofman 2023: 1-3)。かつて忘却は自然なものであり、それに逆らっていかに記憶するかが課題であった。しかし、今や記憶が自然なものであり、それに逆らっていかに忘却するかが課題となる。インターネット上での「忘れられる権利」(Erll 2017=2022: 149) などはその一例であろう。冒頭のホームズやテミストクレスが語る「忘却術」(Weinrich 1997=1999)が要請される所以である。

忘却に対する関心の高まりに比べ、忘却研究は未だ発展の余地のある領野となっている(Connerton 2008; Harris et al. 2010; Nourkova and Gofman 2023)。一般的に「忘却は必然的に失敗とされ」(Connerton 2008: 59)、対であるにもかかわらず、記憶ほど細分化されておらず、その残余カテゴリーの名称に過ぎない(Bowker and Star 1999: 256)。例えば、「さまざまな社会的戦略(検閲、沈黙、和解)、生物やメディアの過程 (世代交代、メディア技術の老朽化)、精神分析の考え方 (抑圧)、または社会的に形成された知覚パターン(選択性、フレーミング)」(Erll : 148-9)などである。

P. コナトン(2008)は忘却という語に含まれる、複数の意味を析出しようと試みている。①抑圧的消去:国家や政府による、歴史的断絶 (および、その事実の否定) をもたらすための記憶メディアの破壊や用語の廃止。②時効による忘却:国家や政府による、和平を維持するためになされる過去の紛争の忘却、③新たなアイデンティティ形成のための忘却:個人や集団が、現在のアイデンティティと無関係な記憶と捨てること。④構造的健忘症:個人や集団が採用しているスキーマや記録媒体の意図せざる選択の結果としての忘却。⑤失効としての忘却:個人、集団さらには社会が、アーカイブ(さらにはそのデジタル化)による情報過多により、保存情報を忘れること。⑥計画的陳腐化としての忘却:資本主義市場における大量生産のサイクルの速さが陳腐化を促し、以前の製品はすぐに忘れられる。⑦屈辱的沈黙としての忘却:社会全体が、敗戦などの集合的恥辱に対し、秘密裏に、無自覚に行う、生存の一形態としての共謀的な沈黙。

もちろんP. コナトン自身が断っているように、上述の忘却類型は発見的なものであり、網羅的なものではない。ここで行われているのは、忘却概念の限定ではなく、むしろ拡大である。特に⑦である。他の忘却類型は、アイデンティティ維持/変更のために、いかに冗長性を意図的に操作しているか、またはスキーマやメディアの特性により、意図せざる結果として維持や変更がもたらされるかを扱う。それに対し、屈辱的沈黙としての忘却は、忘却している状態(結果)ではなく、忘却への意志(プロセス)である。忘却を実現しようとする集合的儀礼、または「忘却の身振り」(Casey 1992)をも忘却の内に含めた点がP. コナトンの功績と言えるだろう[41)]。

本稿もこのような忘却をプロセスとして捉える視点を共有する。前節の議論を踏まえ集合的忘却について定義しておこう。集合的忘却とは、冗長性の(意図的/非意図的に)操作による経路依存の結果、過去の使用に制限をかけようとする試みである。別の角度から言い換えるなら、これはアーカイヴ化である。アーカイヴとは「現在が過去となった時、未来においてその現在について語られうることの基盤で

ある」(Assmann 2008: 102)。とするならば、集合的忘却とは、アーカイヴ化により、ある記憶を不活性化することと言えよう。

では、社会学における既存研究は、集合的忘却を捉えるための、いかなる概念、方法の蓄積を有するのか。一先ずメモリー・ブーム、すなわち1980年以降に焦点を合わせ主な議論を概観していこう。

3.2　社会学における集合的忘却研究の系譜

3.2.1　集合的記憶研究としての評判の社会学

社会学において集合的記憶を論じる際、M. アルヴァクスの名と共に想起することがほぼ通例となっている。しかし、「当時もその後も、記憶に関する社会的視点に貢献しているのはアルヴァクスだけではない」(Olick et al. 2011: 16)。上述のように想起とは選択の別名とするなら、彼の想起と同時に多くのことがアーカイヴ化されている。例えば、S. チャルノフスキー『英雄崇拝の社会的条件』(1919)は、E. デュルケムの議論を踏まえた記念の社会的枠組を論じた先駆的研究であるが、あまりにも専門的なため宗教学者の小さなサークルの外部では評価されず、忘れ去られてしまった (Schwartz 1996: 275)。さらに言えば、M. アルヴァクスは生前、統計学者として名声を得ていた(Olick 2011: 24)[42]。

M. アルヴァクスの仕事は、フランスにおいてはアナール学派に継承されたが、英語圏の社会学においては長らく忘れられたままであった。1980年に人類学者M. ダグラスが『集合的記憶』の英訳を出版した際も、ほとんど注目を集めなかった (すぐに絶版)。1992年にL. コーザーが英訳集『集合的記憶について』をシカゴ大学出版局「社会学の遺産」シリーズから出版することでアクセスは容易になったが、M. アルヴァクスの初期論文からの抜粋であったため、英語圏における受容が初期に偏ることとなった (Olick et al. 2011: 24-5)。「その結果、アルヴァクスの集合的記憶論と彼の社会階級論、家族論、社会的『形態論』との関連性についての理解が乏しく」(Olick 2007: 21) なってしまった。「アルヴァクスの発見は、現在の集合的記憶研究の流れを引き起こしたのではなく、むしろその流れに押し流されたのである」(Schwartz 1996: 276)。

誤解を恐れずに言えば、J. オーリックとJ. ロビンズ (1998) による集合的記憶論のレビューの意義は、以上のような忘れられ、押し流された系譜の回復であったと言ってよい。そこには、一見、記憶を主題に掲げておらずとも、結果的に記憶実践を扱う諸研究を視野に入れているからである。

その一つが、文化社会学、科学社会学における評判研究である。作品やアイデアを生産する領域においては、貢献の評価が問題となる。生産には他者らの協力や支援が不可欠であるにもかかわらず、評価は個人に与えられ、大勢は忘れられる。この不均衡の発生メカニズムの解明が評判研究の課題であると言ってよい (Becker [1982]2008=2016: 379-401; Latour 1987=1999: 177-304)。この研究系譜において評判の構築を追う中で、忘却が次第に焦点化されていった。もう一つの系譜がワーク・プレイスを対象とした組織的忘却の研究である。

3.2.2　経路依存としての評判

G. E. ラングとK. ラング(1988)は、芸術分野における評判(Becker [1982]2008=2016)を集合的記憶の問題として位置づける。銅版画は19世紀半ばから終わりにかけ欧米で流行したものの、世界恐慌、

第二次大戦を経てそのブームは下火になった。それに伴い、一度は高い評判を得た銅版画アーティストたちの大半が忘れられていった。この評判の盛衰の社会的条件をG. E. ラングとK. ラングは次のように説明する。まず評判とは自己強化的プロセスであり、ひとたび評判を獲得すれば、評判が評判を呼び始める。この時、①アーティストが当時の芸術界の重鎮、有名人とネットワークを形成している。②歴史的偶然。すなわち、当時耳目を集めた事件や流行思想（社会主義、フェミニズム）と作品モチーフが関連していると注目を集めやすい。そして、確立した評判は、③アーティスト自身が多くの作品を作成し、記録し、保管の手配をする。④アーティストの死後、作品の記録や保管を請け負う家族や友人ネットワークの存在により、その持続性が左右されることとなる。測定不能な小さな差が、後の評価に大きな格差をもたらす。つまり、過失も累積的に影響する。記録も少なく、各種ネットワークから切り離されたアーティストは評判を得ることが難しく、それゆえにさらにネットワークから切り離され、やがて忘却されるのである。

3.2.3 「非人格化」による消去

G. A. ファインも評判を集合的記憶としてその構築過程を考察している。ただし彼が扱うのは政治分野における「悪党」や「無能」といったネガティブな評判であり、その分析の過程で「忘却」が次第に焦点化していく（Ducharme and Fine 1995; Fine 1996）。

B. アーノルド（1741-1801）は、アメリカ独立戦争時、サラトガの戦いなどで活躍した軍人である。当初この功績により英雄視されたが、敵国イギリスと密かに共謀するようになり、これが発覚するとすぐさま亡命し、イギリス軍として戦闘に従事した。これによりB. アーノルドは当時の人々から「裏切者」として激しく非難されることとなった。英雄から裏切者へ。この評判の転換をG. A. ファインは「悪魔化 demonization」と「非人格化 nonpersonhood」として説明する。すなわち、当時のアメリカの人々は、B. アーノルドを生来の悪として特別視することでコミュニティから切り離し、彼の名前や戦功を記録や記念碑から抹消したのである（Ducharme and Fine 1995）[43]。

3.2.4 評判事業家

「支配的な否定的感情に対し、代替的な肯定的言説を提供する支持者がいなかったため、アーノルドの評判は封印された」（Ducharme and Fine 1995: 1320）。このように評判の維持には、他者の評判に関心を持ち、聴衆に向け説得的に喧伝でき、かつ影響力を行使できる位置にいる人々、すなわち評判事業家（reputational entrepreneurs）を必要とする（Fine 1996: 1162）。第29代アメリカ大統領（共和党）W. G. ハーディング（1865-1923）は、現在でこそ「無能」、「凡庸」、「不道徳」などの形容詞と共に語られるが、在職当時は人気もあり多くの業績を残した人物であった。にもかかわらず、失敗の記憶が固定化するには、彼の肯定的な特徴の忘却を必要とする。公的（主にメディア）空間において評判の構築に従事するのが評判事業家である。W. G. ハーディングの突然の死の後、民主党および共和党内の反体制派、ジャーナリストや歴史家たちは、彼の在職中の汚職や不正を「オハイオ・ギャング」、「ティーポット・ドーム」などのスローガンを用いて激しく攻撃した[44]。この攻撃に対し、W. G. ハーディングの「偶然の死」により、評判の維持は他者の手に委ねられていたが、彼の支持者たちは政府中枢から排除され、また共和党全体もあくまで「彼個人の失敗」と位置づけ沈黙した。さらに、ハーディング夫人は、関連書類の多くを焼却

したために歴史家による再評価の道も閉ざされてしまった。W．G．ハーディング支持の評判事業家たちは、動機や組織的基盤を欠いていたがゆえに、失敗の評判が定着することになってしまった。そして一度、評判が固定化すると代替的な記憶――「正統的保守主義者」、「初のアフリカ系大統領」――も忘れられることになったのである(Fine 1996)。

3.2.5　記憶のテンプレートと記憶のサブカルチャー

評判事業家が作成するスローガンやストーリーは「公共的記憶の鉤」(Fine 1996: 1187) として機能する。「私たちは歴史を、出来事の詳細を通じてではなく、これらの出来事を特徴づけ要約するラベルを通じて想起する」(Fine 1996: 1170)。公共的空間においては複数のラベルが競合しているため、「政治家の安定した評判を理解するためには、何がもっともらしい代替モデルを構築し、なぜこれらのモデルが選択されなかったのかを調べねばならない」(Fine 1996: 1187)。

評判事業家が作成するラベルやスローガンは、理解のスキーマとして機能する。G．A．ファインとT．マクダネル (2007) は、この点を掘り下げ、そのスキーマは忘れられた後も効果を発揮すると論じる。彼らはこの論文において、N．マクラフリン (1998) の議論を踏まえ、忘却もまた社会学的説明を要する事象であることを強調する。すなわち「集合的忘却は、①ある出来事の記憶を鮮明に保つことに関心のある、制度的に位置づけられた社会的行為者が足らず、②その位置にある行為者が、その出来事を解釈テンプレートとして使用しないと決定することで、たとえその結果が残っていても、集合的記憶におけるその出来事が衰退する際に生じる」(Fine and McDonnell 2007: 171)。テンプレートとは、評判事業家が「注目すべき出来事として定義するものを具体的に参照することで、個人、集団、組織により生み出されたスキーマ――認知的、レトリック的、行動的、制度的」(Fine and McDonnell 2007: 171) を指す。要するにテンプレートとは、出来事を構造化するストーリーであるといってよい。それゆえ、テンプレートに適合しない出来事は忘れられ[45]、またテンプレートを採用する人々がいなくなれば、テンプレートとなっていた出来事自体が忘却される。しかし、「ひとたび、ある反応が制度的戦略となると、その起源が忘却された後も、効果的と見なされた行動形式が長く続く場合がある」(Fine and McDonnell 2007: 172)。

アメリカ政府による左翼急進派に対する弾圧は「赤狩り red scare」として記憶されているが、第二次世界大戦参戦前夜、1930年代後半から1940年代前半にかけての孤立主義右翼に対する政府の弾圧――「褐色の恐怖 Brown Scare」――については一般的には忘れ去られている。時のルーズベルト政権は、孤立主義右翼に対し「ナチの手先」、「ファシスト」などのレッテルを貼り弾圧、1944年にはスパイ防止法(1917年)、外国人登録法(1940年)によって30名の「ナチスのシンパ」が起訴された(合衆国対マクウィリアムズ事件)。当初は新聞で大々的に報道されたものの、罪状は曖昧で、陰謀や煽動の証拠も不明確であったため、裁判は混乱し、最終的に新聞は「茶番劇」と評した。他の孤立主義右翼はさらなる訴追恐れて沈黙し、真珠湾攻撃に説得され、ナチスの蛮行に恐怖し、戦争遂行を支持した。政府による極右プロパガンダは功を奏し、1946年11月被告全員に対する起訴は棄却された。こうして支持者たちや、メディアの関心を失った「褐色の恐怖」の記憶は、次世代に届くことは無かった(Fine and McDonnell 2007: 170-8)[46]。

一般市民の忘却とは対照的に、政府と法曹界はここから重要な教訓を引きだした。すなわち、マクウィリアムズ裁判は、①政府が過激派を統制するモデルとして――孤立主義右翼に対する弾圧の手法は、そ

のまま後年の左翼急進派へとスライドした。②弁護人が裁判の正当性を破壊するための法廷戦術のモデルとして利用された。たとえ公の言及がないとしても、行為者たちはマクウィリアムズ裁判の結果に基づいて将来の出来事を方向付けたのである(Fine and McDonnell 2007: 179-82)。

3.2.6 唯一性による記念

このように集合的忘却とは、社会のメンバーが同じことを忘れるという意味ではない。「記憶と忘却、知識と無知は、異なる共同体、集団、個人の間で不均等に分配される」(Schwartz 2009: 123)。B. シュワルツは次のように問う。アメリカ公民権運動のヒロイン、R. パークスの名声はなぜこれほど高いのか。言い換えれば、なぜR. パークスよりも大きな功績を残した多くの人々が忘れ去られてきたのか(Schwartz 2009: 123)。「唯一性 oneness」とは、個人や集団が複雑な比較を単純化するために、一人の目立った人物を選び、他の人々を無視することを指す(Schwartz 2009: 125, 127)。

R. パークスが公民権運動の母であるというのは誤りである。1955年12月、彼女がバス隔離条例違反で逮捕される以前にも複数の人々――C. コルヴィン(1955年3月逮捕)、A. ブラウダー(1955年4月逮捕)、M. L. スミス(1955年10月逮捕)――が抗議活動を続けていた。いくつかの要因が重なり、R. パークスは運動における「唯一性」を獲得する。①私生活に問題がなかったこと。②ネットワーク:R. パークスは全米有色人種地位向上協議会のアラバマ州モンゴメリー支部の書記を務めており、抵抗運動の指導者や弁護士に知られていた。この中には後に有名になるM. L. キング・ジュニアやR. アバナシー、E. D. ニクソン、F. グレイらが含まれていた。③偶有性:R. パークスの逮捕後、モンゴメリー市は抗議者たちと妥協案の交渉の席を設けたが決裂した[47]。さらに市は、1956年2月、R. パークスを含む90人を反ボイコット法違反で逮捕した。大量起訴は全米の注目を集め、彼女の名前は頻繁にメディアに登場することとなった。④マタイ効果:ひとたび名声を獲得すると、R. パークスは様々な会合や講演に招待され、それがさらに彼女の名声を高め、「公民権運動の母」となった。その結果、C. コルヴィン、A. ブラウダー、M. L. スミスらは歴史の影に隠れていった。R. パークスの物語は、公民権運動を単純化し、抑圧された人々が正義のために戦うというスキーマを提供する。唯一性により、歴史はより記憶に残りやすいものになる(Schwartz 2009: 127-40)。

3.2.7 不協和音による忘却

集合的忘却は、「特定のトピックが永久に脇役にされ、忘れ去られ、あるいは完全に否定される可能性」(Vinitzky-Seroussi and Teeger 2010: 1104)へと考察範囲を拡大したと言ってよい。V. ヴィニツキー=セローシとC. ティーガーは集合的記憶と忘却における沈黙の4類型を提示する。①追悼行事における黙祷など、記憶を強化するための構造化(身体化)された明示的沈黙、②特定の人物や出来事に全く言及しない、報道、出版しない、記念行事を行わないなど忘却を目的とした明示的沈黙。③記念の中の沈黙:多くの人々が記念行事に参加できるように、対立の原因となりそうな過去を部分的に黙殺すること。④不協和音による沈黙:ある記念日や行事を、複数の他の記念行事とまとめてしまうことで、暗黙の裡に独自性が損なわれ忘却が助長されること(Vinitzky-Seroussi and Teeger 2010)。

3.3　組織は忘れる

3.3.1　F．バートレットの忘却

M. ダグラスは、M. アルヴァクスの集合的記憶論を英語圏に紹介した人物である。彼女の回想によれば、1950年代以降、記憶と忘却は人類学における最大の関心事であった。人類学者たちは、自文化を理解するために、血縁・親族関係および取引慣行の研究を通じ、過去と未来がカプセル化されるメカニズムを追った。これにより社会的枠組が意識にどのように作用するかを明らかにしようとしたのである（Douglas 1995: 26）。M．アルヴァクスの翻訳も、このような問題意識の延長線上に位置していると言ってよい。彼女自身1987年の論考において次のように主張する。「記憶は制度的構造により維持される」（Douglas 1987: 81）。その制度的忘却の一例が冒頭で触れた心理学者F．バートレットの忘却のエピソードである。当初F．バートレットは記憶の社会的影響を研究するつもりであった。しかし、その彼のアイデアは、当時の心理学における制度化された検証手続きとの接点を欠いていたがゆえに忘れられてしまった。他の研究者達を自身のプロジェクトに巻き込むことに失敗してしまったからである（Douglas 1987: 81-90）。

3.3.2　アクセス制限としての忘却

ここでM．ダグラスは制度とアイデアを直接結び付けていないことに注意しよう。その間にはアイデアを実際に使用する研究者ネットワークが介在している。このようなネットワークの変容、分離と記憶／忘却を考察したのがY．エンゲストロームら（1990）である。彼らは医療組織における記憶と忘却に関し次のように考察した。記憶は医療活動における重要な一部である。それは患者の病歴を聴取し保存すること（一次記憶）、および「昔はこうしていた」と、過去の治療法や組織活動について思い出すこと（二次記憶）からなる。つまり、記憶とは一次記憶（病歴を取る）と二次記憶（病歴の取り方を再構築する）ことの往復運動である。そして、この運動はヒトやモノなどの外部記憶補助装置によって媒介されている。とするならば、忘却とは何らかの理由により、上記の運動が妨げられることに他ならない。例えば、医師が持つある患者の病歴記憶とカルテに記載された情報との間に関連性を構築できないと忘却が起こる。また、メンバーの入れ替えが激しい病院では、長年勤めていた職員が退職したり、古いカルテや内部資料を破棄したり、アーカイブ化――「どこかの倉庫にあるはず」――することにより活動システムから二次外部記憶が喪失することによっても忘却が生じる。すなわち、忘却とはヒトやモノなどの記憶装置へのアクセス制限に他ならない（Engeström et al. 1990: 140-50）。

3.3.3　実践を維持するための忘却――除去と消去

G．ボウカーとS．L．スター（1999）は、上述のY．エンゲストロームらの動的な忘却理論を評価しつつ、彼らが依然として忘却を否定的に捉えていることを疑問視する。そして、組織がアイデンティティを変える際、積極的な忘却が伴うことを指摘する。分類システムは過去へのアクセスを提供するとするなら、組織はどのように分類システムを操作し、過去に関する物事を選択的に忘却しているのか。G．ボウカーとS．L．スターは、この問いに対し、看護介入分類の作成と運用を事例に解答している。1992年以来、看護情報学者J．マクロスキーとG．ブレチェクをはじめとするアイオワ大学グループは、看護師の日常業務を介護介入分類として電子的体系化しようと試みている。看護師の仕事は目に見えない。投薬とそのモニタリングの他にも、予期指導や気分管理、さらにはベッドカバー替え、呼び出しボタンを

近づける等々の業務がある。これら一連のケア活動は特定の医学診断カテゴリーを横断することが多く、それゆえ医療記録として積極的にアーカイヴ化されることがなかった。過去の知識をコード化し、現在に結びつける方法が無かったのである。看護介入分類の導入の目的とは、看護記録のデジタル化により、①日々の看護実践が蓄積されることで、地域を超えた比較が可能となり、将来的に客観的研究指標の確立。②看護介入の分類により、看護サービスとコストの決定が容易になること、である。

G. ボウカーとS. L. スターによれば、組織において新たな分類システムを導入、維持するためには2つの忘却が必要であるという。①「除去 clearance」：ある時点で過去を区切り、知識が現在に及ばないようにすること。看護介入分類の場合、過去の実践を否定するのではなく、現在に無用な知識を取り除きつつ新たにプロジェクトを開始することである。②「消去 erasure」：将来の目的にとって保存する価値がないとみなされた現在の情報を破棄すること。看護記録を過剰に規定することは、個々の看護師から裁量を奪うことを意味する。ローカルな実践として持続するため、看護介入分類においては過度な細分化が抑制されている。すなわち、記録入力の際、ローカルな実践は消去され、分類システムに登録された情報のみが保存される（Bowker and Star 1999: 28-31, 255-82）。

3.4 忘却の中の忘却——時間性への問い

以上のレビューは社会学における集合的忘却を網羅したものではない。しかし、繰り返される論点があるものまた確かであり、試論の域を出ないが、集合的忘却を理解するためのテンプレートの原型として再構成しておこう。

①**経路依存**（Lang and Lang 1988; Fine 1996; Fine and McDonnell 2007; Schwartz 2009）。集合的忘却に関わる冗長性の増減のメカニズムの説明として採用されているのは自己強化プロセスである。それゆえ、②初期条件の微妙な差をもたらす**偶有性**が重要となる（Lang and Lang 1988; Fine 1996; Schwartz 2009）。さらに、③現実の要素の一部を操作することで——**反実仮想**——、代替的可能性を回復し、「こうもありえたにもかかわらず、なぜ選択されなかったのか」と経路依存の発生／崩壊へと視点を振り向けることができる（Fine 1996）。④複数の可能性からの選択を説明されるのに導入されるのが、**スキーマ**または**テンプレート**など、現実の情報を組織化、要約する機能を果たす概念セットである（Douglas 1987; Fine 1996; Fine and McDonnell 2007; Schwartz 2009）。⑤このようなスキーマやテンプレートに適合しないものは**消去**され、作り直す場合はそれ以前の情報の多くが**除去**されることとなる（Ducharme and Fine 1995; Bowker and Star 1999; Vinitzky-Seroussi and Teeger 2010）。それゆえ、集合的記憶と忘却においては、あるスキーマを有する人やモノのネットワークが必要であり、さらに言えば、新たなテンプレートを生み出し、ネットワークを形成する**評判事業家**が重要な役割を果たす（Lang and Lang 1988; Engeström et al. 1990; Fine 1996）。

以上が集合的忘却研究のテンプレートである。これをすぐさま方法の基準へと祀り上げることは些か性急に過ぎよう。その前にテンプレートの効果を切断しなければならない。すなわち、テンプレートに適合しないものは消去されるならば、ここでいかなる論点が潜在化——アーカイヴ化——されているのか。誤解を恐れずに言えば、集合的忘却研究において忘却された論点とは、**時間性**であると言ってよい。

評判の社会学は、ある評判を所与とし、普及条件としてのネットワーク構築における評判事業者の働きに着目してきた。ここでは評判の構築過程は「自己強化」、「マタイ効果」などの説明で片づけられブラックボックスになっている。G. A. Fine（1996）は、複数の可能性が競合する状況で、なぜある選択肢が選ばれなかったのかと、正当にも経路依存の発生プロセスに焦点を当てているが、続く研究ではB. シュワルツの分散としての集合的記憶を補助線として、集団ごとに採用するテンプレートの違い――記憶のサブカルチャー――に落とし込んでしまった（Fine and McDonnell 2007）。B. シュワルツ（2009）も、R. パークスを事例にブラックボックスを開く作業に取り組んだものとして見ることができるが、マタイ効果を説明項として用いているため、論点先取の感は否めない。

集合的忘却研究において時間性が忘却されていることは皮肉としか言いようがない。ネットワークから時間性へ。すなわち、どのような順序と組み合わせの結果、ある可能性を選択することが難しくなり、特定のものへと安定／不安定化してゆくのか。このプロセスを捉える語彙と方法の開発が今後の集合的忘却研究の課題と言えよう。

とするならば、以上の社会学における集合的忘却研究の系譜においてN. マクラフリンはいかなる位置にいるのか。以下で明らかにしていこう。

4　冗長性の増大としての忘却

前節で確認したように、社会学における集合的忘却研究は2000年以降、明示的に集合的忘却をテーマとして設定するようになるが（Fine and McDonnell 2007; Schwartz 2009）、G. A. ファインも指摘しているように、その転換の契機がN. マクラフリン（1998）に他ならない。

N. マクラフリンによれば、それまでの評判の社会学は、有名人に焦点を当てることが半ばデフォルトとなっており、それゆえ、かつて有名であった知識人の排除への問いを構造的に閉ざしてきた。E. フロムは1940年代から50年代にかけて、著名な精神分析家、社会学者、公共的知識人であったが、60年代以降、アメリカの知識人界では時代遅れと見なされた。このE. フロムの栄光と没落を、M. ラモン（1987）のデリダ論の枠組を踏まえつつ、一部改良することで説明すること。これがN. マクラフリンの問いである（McLaughlin 1998: 215-6）。よって、まずM. ラモンの論考の内容を簡単に押さえておこう。

4.1　文化的商品としての「脱構築」

1980年代半ば当時、複数のアイデアや知識から、いかにして特定のアイデアが選択され、正統化を獲得し、普及するのかに関する研究は、主に科学社会学によって担われていた。そのまなざしを人文・社会科学に再帰的に振り向ける研究は端についたばかりであった（Lamont 1987: 585）。

M. ラモン（1987）は、後の新しいアイデアの社会学に結実する、ローカルな文脈にアイデア生成を位置づけて理解しようとする動向の先駆をなすものである。

ある文化的商品が文化市場において、重要なものとして受容される文化的、制度的、社会的条件とは一体いかなるものか。M. ラモンは、この問いを、J. デリダのフランスとアメリカでの受容の比較を通

じ明らかにする。

「脱構築」――あらゆるテクストに内在する暗黙のヒエラルキーを暴くこと――はJ. デリダの代名詞であるが、この概念は、ハイデガー、フッサール、ニーチェ、ヘーゲルといったフランス哲学界において重要視されるドイツ哲学との対話から構成されている。それゆえ、もしJ. デリダがヒューム、ロック、ミルなどのイギリス哲学の伝統に自身を位置づけていたら、話は違っていたかもしれない。また脱構築自体、哲学以外の様々なテクストに適用でき、それが同時代の専門家――M. フーコー、E. レヴィナス、R. バルト、P. リクール、P. ド・マン――との対話を可能にし、彼らの名声がJ. デリダに届くことになる(Lamont 1987: 590-4)[48]。

既存の知的・人的ネットワークに自身を位置づけることは、J. デリダが論争というメディア・イベントを仕掛けることを可能にし、それは名声をさらに高めることとなった。その一例がC. レヴィ＝ストロース、M. フーコーらとの構造主義論争である。当時彼らはすでに定評を得ており、論争は各種文化メディアに取り上げられ、J. デリダの知的正統化に貢献した。J. デリダは前衛的知識人というカリスマ的イメージを確立し、彼の周囲には、S. コフマン、F. ラクー＝バルト、J-L. ナンシーらのJ. デリダと問題を共有する知的ニッチが形成され、脱構築の普及に貢献した(Lamont 1987: 596-600)。

さらにJ. デリダの脱構築は、1960年代以降の、より大きな社会的・政治的文脈にも合致していた。すなわち、構造主義論争を通じてパッケージ化された「脱構築」という文化的商品を購買する層の成長である。①戦後フランスの経済成長は、上流中産階級の拡大をもたらし、この階層の人々は自身の地位向上する手段として洗練された文化財の消費に多大な投資を行った。この商品のなかに「脱構築」も含まれていたのである。②1968年以降、左翼運動は停滞気味であり、脱構築による微細な権力分析は新しい理論的視点として歓迎された (Lamont 1987: 594-6)。つまり、J. デリダの名声は、「縮小しつつある哲学の専門家達に向けてではなく、パリの知的市場の構造を利用し構成されていた大衆に向けて語りかけた」(Lamont 1987: 607)ことによる。

J. デリダの脱構築は1972 ～ 3年のブームの後、フランスでは下火になり、代わってアメリカの文芸批評分野に迎え入れられた[49]。1960年代半ば以降、アメリカの文芸批評分野は新批評主義に代わる新たなパラダイムを求めていた。そこへフランス構造主義と同時にJ. デリダの脱構築もアメリカ文化市場に輸入されたのである。これはアメリカ文芸批評の中心であった、イェール大学、コーネル大学、ジョンズホプキンズ大学といった名のある大学によってなされ、またP. ド・マン、H. ミラー、H. ブルーム、J. カラーなどの研究者も脱構築をアメリカの読者にとって魅力的な言葉で翻訳した。脱構築はそれまでバラバラであった批評家たちに方向性を与える機能を果たし、これらの批評家グループが相互批判することで読者と市場が形成されていった(Lamont 1987: 610-4)。

4.2 評判の社会学のための4つの視点

N. マクラフリンは、評判の社会的構築は、以下の4つの点から理解できるとし、上述のM. ラモンのJ. デリダ論も暗黙の裡にこの4つの視点に基づき思想の受容を考察していると主張する(McLaughlin 1998: 218-20)。①時代の風潮：社会的・政治経済的要因。②地理的・国家的伝統：知的中心地からの距離。

③制度的威信：既存の有名な、大学、出版者、雑誌などとのコネ。④個人的特性：個人的性格、他の同僚との交流関係。

以下の表2は、縦軸に４つの視点、横軸にEフロムの盛衰を配置し、Nマクラフリンの主張を整理したものである。

4.3　正統性からの逃走／異端からの創造

しかし、N．マクラフリンは、この4類型では知的運動における正統と異端の力学を社会学的に説明できないと批判する（McLaughlin 1998: 220）。J. デリダの名声が、彼自身によって構築された知的、人的ネッ

表2　E．フロムの栄光と没落

	E．フロムの名声 （McLaughlin 1998: 221-4）	E．フロムの凋落 （McLaughlin 1998: 224-31）
①時代の風潮	・E．フロムは 1933 年にドイツからアメリカに渡り、1941 年『自由からの逃走』を出版。これは当時の全体主義、権威主義への関心に合致するものであった。 ・『人間における自由』（1947）は、感情の商業化および疎外に対する社会批判を生み出すことに寄与した。	・E．フロムは自由主義的民主社会主義を擁護していたため、1960 年代後半の新左翼の過激思想、1980 年代の新自由主義からも孤立していた。 ・民主社会主義系オピニオン誌『ディセント』誌上において E．フロムと H．マルクーゼの論争が掲載され、後者の批判が定着した。
②地理的・国家的伝統	・『自由からの逃走』は、洗練されたヨーロッパ流の社会理論をアメリカに輸入する一例であり、K．マルクス、S．フロイトのアメリカ普及に貢献した。 ・E．フロムはニューヨークに居住し、精神分析医として成功していた。	・1950 年代から 60 年代にかけ E．フロムはメキシコに住み、1970 年代はヨーロッパに戻っていた。
③制度的威信	・1930 年代はコロンビア大学社会研究所の終身在職メンバー。 ・ニューヨークの大手出版社と『自由からの逃走』の契約締結。 ・社会と心理の結合という E．フロムの主張は、T．パーソンズや D．リースマンらに影響を与え、また批判社会学の基礎を築いた。 ・D. リースマン『孤独な群衆』(1950) は、E．フロムの思想の創造的修正と適応の普及に貢献した。	・1920 年代から 30 年代にかけアメリカの社会科学は自然科学をモデルとして専門化を図ろうとしたのに対し、E．フロムは自然科学と人文科学を組み合わせた学際的人間科学を構想していた。 ・個人の性格、社会的性格は独立した因果要因であり、かつそれらは社会経済構造により形成されるという E．フロムの理論を実証するためのリソースの不足。 ・フランクフルト学派の歴史から排除された。
④個人的特性	・E．フロムは亡命知識人とネットワークを築いていた。	・E．フロムは気難しい性格であり、意見の相違を解決する能力に欠けていた。 ・支持者たちのネットワークを築くことができなかった。

出典：N．マクラフリン（1998）を元に作成

トワークに依存するように（Lamont 1987）、E．フロムの名声も、ヨーロッパ由来のアイデアをアメリカ文化市場に普及しうるネットワーク構築に由来する。ゆえに、後年のネットワークから孤立し、E．フロムのアイデアを使用する人々がいなければ忘却される。

しかし、なぜE．フロムは孤立してしまったのか。N．マクラフリンはこの問いを、知的運動における正統と異端という視点から説明する。「フロムは、フロイト主義とマルクス主義の伝統から主要な洞察を引きだしたが、フロムの研究は、これらの正統派の中心的教義に異議を唱えていた」（McLaughlin 1998: 233）。E．フロムは、フロイトの家父長的前提や性欲本能に焦点を当てた非歴史的視点を批判し、

マルクスの経済決定論や文化、心理的要素の軽視を批判していた(McLaughlin 1998: 232)。

つまり、「フロムの革新的思想は、社会学的に周縁的な位置にあったことに関係」(McLaughlin 1998: 233)している。それゆえ、「あらゆる正統性からの脱却を目指すフロムの姿勢は、彼自身の思想を洗練、普及させるための代替的制度基盤を発展させることを妨げていた」(McLaughlin 1998: 235)のである[50)]。

E. フロムの先駆的洞察は、彼の名声により間接的に各学問分野に影響を与え、その中で吸収、一般化していった。N. マクラフリンはR. K. マートンの言葉を引用し次のように締めくくっている。「フロムは『取り込まれることによって消された』」(McLaughlin 1998: 240)。

4.4 N. マクラフリンの正典化の影で

4.4.1 冗長性の増大による忘却

M. ラモン(1987)のJ. デリダ論において、その後に展開される論点がほぼ出そろっていると言ってよい。すなわち、現在におけるJ. デリダの名声を所与とし、J. デリダ自身および評判事業者たちによる知的・人的ネットワークの構築、「脱構築」という商品を適切なテンプレートを有する市場に届けたこと、構造主義論争により注目をあつめ、それがさらなる名声を呼んだこと。

N. マクラフリン(1998)は、このJ. デリダ論を鏡像として、E. フロムの名声の盛衰を描いたものである。つまり、初期の名声を生み出した知的・人的ネットワークからの孤立がE. フロムの名声低下の要因であり、さらにその孤立は、フロイトとマルクスに関する知的運動における彼の異端性に由来していた。すなわち、E. フロムをアメリカで有名にしたものが、後年、彼の名声を低下させる一因にもなったのである。誤解を恐れずに言えば、この「取り込まれることによって消された」とは、冗長性の増大による忘却として解釈することもできる。つまり、E. フロムの思想は余りにも一般化したために、他のものと混ざり合い独自性が失われ忘れ去られてしまったのである。この冗長性の増大による忘却は、P. コナトン(2008)、V. ヴィニツキー=セローシとC. ティーガー(2010)において指摘されているが、1998年の時点でN. マクラフリンが言及していることは、彼の先駆性として評価してよいだろう[51)]。

4.4.2 「W. ゾンバルトの忘却」の忘却

このようにN. マクラフリンは集合的忘却を社会学的説明の俎上に載せたがゆえ、G. A. ファイン、C. キャミックらの先行研究のリストに載せられ、正典化の軌道に乗ることとなった……。果たしてそうか。

なぜN. マクラフリンでなければならなかったのか。これまでの議論において記憶とは、ある基準による選択であり、起源が設定されるということは、他のものを忘れる、アーカイヴ化することが伴う(Bowker 2005: 26)。一体、誰が、なぜ忘れられるのか。G. A. ファインが指摘するように、他の可能性がありえたにもかかわらず、なぜ選択されなかったのか、その理由を探らねばならない(Fine 1996: 1187)。

N. マクラフリンの影に隠れてしまった可能性としてR. グランドマンとN. シュテール(2001)を挙げるとこができる[52)]。彼らは、なぜW. ゾンバルトは古典社会学に組み込まれなかったのか、すなわち忘れ去られたのかと、N. マクラフリン同様、集合的忘却を探究テーマとして明示的に掲げているからである。

N. マクラフリンの方が3年早かったから、と発表時期を理由にすることもできよう。先行者は注目を集めやすく、それが次第に集合的忘却研究の代名詞としてN. マクラフリンの名前が使用されるようになっ

たというストーリーである。しかし、先行性はR．パークスの事例（Schwartz 2009）からも分かるように決定的な理由にはならない。考えられる他の理由としては、N．マクラフリンは自身の主張を遂行的に実践していた点が挙げられる。

R．グランドマンとN．シュテールも2001年当時としては集合的忘却を明確に社会学の説明対象とした点では新しかった。ただ、彼らは余りにも「新しい」ものとして提示しようとしすぎていた。W．ゾンバルトは生前、M．ヴェーバーと並ぶ著名な社会科学者であったが、現在両者の名声には大きな違いがある。R．グランドマンとN．シュテールはW．ゾンバルトの著作を検討し、資本主義と宗教（特にユダヤ教の果たす役割）の関係についてW．ゾンバルトとM．ヴェーバーに大きな違いがないことを確認する。そして、名声の差として、①M．ヴェーバーが早世したこと。②彼が自由民主主義を支持していたことを挙げる。対するW．ゾンバルトは自由民主主義に批判的であり、資本主義による退廃に幻滅していた。彼は新秩序の構築をドイツ民族に託したが、これは特定人種への敵視を伴っており、後のナチス政府支持へとつながった。M．ハイデガーはナチス政府を支持しながらも戦後も名声を失わなかったが、これは実存主義、ポストモダン論において、彼がギリシャ哲学、ニーチェと20世紀を媒介する役割を果たす存在として受容されたからである。W.ゾンバルトは支持者の不在ゆえに、忘れられたのである（Grundmann and Stehr 2001: 257-73）。

このようにR．グランドマンとN．シュテールの手法は、W．ゾンバルトの著作を分析し、ある特徴を取り出した上で、それが時代に合わなかったとすることでW．ゾンバルトの忘却を説明するというものである。比較項としてのM．ハイデガーの場合は、実存主義、ポストモダン論などの（曖昧ではあるが）受容層に言及しているものの、W．ゾンバルトの忘却については、ほとんど何も示されていない。つまり、彼らの分析はテクスト／文脈という二項対立を所与とし、一方を他方に還元して説明する旧来の知識社会学的手法なのである。

確かにR．グランドマンとN．シュテールの立てた問いは新しい、しかし、古い方法で解いてしまったために、集合的忘却プロセスを説得的に説明することには失敗しているのである。さらに言えば、彼らは「新参者のジレンマ」（Camic and Gross 2001: 247）に直面した際、当時すでに利用し得たはずの、M．ラモン（1987）、C．キャミック（1992）、N．マクラフリン（1998）らの議論を先行研究として採用しなかった。彼らの「新しさ」は、既存の評判の社会学、アイデアの社会学を「除去」（Bowker and Star 1999）することの上に成り立っている。それは彼ら自身の可能性の空間を制限することでもある。つまり、R．グランドマンとN．シュテールは、彼ら自身が言及しているM．ハイデガーが行ったこと――ギリシャ哲学、ニーチェ、20世紀哲学など、既存の系譜に自身を位置づける――を行っていないがゆえに忘却されたといえよう。新しさの種子は過去の大地を必要とする。

翻ってN．マクラフリンの場合、彼は自身の主張を遂行的に実践している。つまり、評判研究の系譜の中に自身を位置づけている。それゆえ、G．A．ファインらに集合的忘却研究の先駆として（Fine and McDonnell 2007）、C．キャミックとN．グロスの新しいアイデアの社会学の先行研究として（Camic and Gross 2001）、複数の場面で選択――冗長性の増大――されたがゆえに正典化の軌道に乗ることができたといえよう[53]。

それゆえ、先に指摘した集合的忘却論の限界をN. マクラフリンもまた抱え込んでいる。つまり、ネットワーク中心であり時間性は考慮されていない。E. フロムの異端性は所与であり、どのような順序、組み合わせにより、次第に名声が低下していったのか、そのプロセスの説明は開かれた問いのままとなっている。それゆえ、彼の記述はいくつかの「消去」を伴う。例えば、『ディセント』誌上におけるH. マルクーゼとの論争は、J. デリダにおける構造主義論争のように、E. フロムの名声を左右する転換点の一つになりうると考えられるが、「H. マルクーゼの批判が定着した」(McLaughlin 1998: 226)と結果が示されるのみである。また冗長性の増大のプロセスについても、R. K. マートンという権威(レトリック)に訴えることでブラックボックスとなっている。

とするならば、論争を時間性の区切りとし集合的忘却のプロセスを追うことは、将来の探究にとって有力候補の一つになりえるかもしれない。

5　正典化と忘却の身振りに向けて

5.1　社会学的健忘症

近年、知識生産の現場において個人からチームへの移行が増加しつつある。ある研究によれば社会科学においてチームによる論文執筆率は1955年の17.5％から2000年には51.5％へと増加している(Wuchty et al. 2007)。「科学技術の仕事は本質的に共同作業であるにもかかわらず、大学や産業界の管理機構はいまだに研究者個人の英雄神話を支持する傾向がある」(Bowker 2005: 125)。C. キャミックとN. グロスの新しいアイデアの社会学は、英雄神話を批判し、集合的創造性を捉えようとする試みである。すなわち、アイデアをローカルなネットワークに位置づけ、その生成、普及、消滅を追うのである(Camic and Gross 2001)。

本邦においてこのような問題関心が全く存在しなかったわけではない。

> 学説の研究は、狭い意味での「著作」「論文」をテクストにして、ともすればある特定の一人の思想家だけの研究に閉じ、伝記的な整理や著作年表づくりに基づく批評に終わってしまう。用語やカテゴリーを「著者」横断的につなげ、複数あるいは多数の思想家を取り上げることで、理論枠組みの歴史をコンテクストとして作り出すことができれば学史として評価されやすいが、なお文学でいえば著者中心の作品研究というスタイルをなかなか超え出ていかない。(佐藤 2003: 14)

新しいアイデアの社会学の問題関心とも共鳴する、この主張は（本稿の著者を含め）ほとんど忘れられていたと言ってよい。なぜ私たちは忘れてしまうのか。H. ガンズは、この問題を「社会学的健忘症 sociological amnesia」(Gans 1992)と呼び、P. コナトン(2008)の「失効としての忘却」に類似した説明を与えている。すなわち、日々大量の研究成果が生産される一方、他方でアカデミズムは出来高払いの工業のように変貌しつつある。迅速な生産を求める状況下においては、過去を探究する時間も正当化する理由もない。むしろ過去を忘却することは、独創的な知見を（人為的に）増やし、論文の数を増やすた

めに機能的である(Gans 1992: 706-7)。ゆえに、忘却は規範となる(Assmann 2008: 97)。

5.2　本稿の意義と課題

「学問というものは、今日、明確な忘却という要素を抜きにしては実践できぬものとなっている」(Weinrich 1997=1999: 395)。第1節で論じたように、近年の新しいアイデアの社会学は、正典化の概念により、集合的創造だけではなく集合的忘却も社会学的説明を要する事象としている。ローカルな状況における知識生産を、ある学問分野で複数ある諸研究の内、何が正統とされ／忘却されるのかを、師弟関係、連携と対立、キャリア戦略、さらに非学術的要因などから、経路依存が起こる瞬間を明らかにするのである(Huebner 2014: 4-5; Adler-Nissen and Kropp 2016: 12)。

では、ローカルな状況に対する記憶／忘却という視点は、一体いかなる認識をもたらすのか。これが本稿の問いであった。禁止語の発想を忘却に適用し、複数の可能性をどのように区切り、つなげ、読むか、すなわち「事例化」の方法としての可能性の探究である。

柳田国男の記憶術を手がかりに、集合的記憶をローカルな状況へと差し戻すことで目指したのは、集合的記憶／忘却を語り、理解する際のテンプレートとしてのメタファーの転換である。すなわち、カード・ボックスからジャズのセッションへ。集合的記憶とは、分散化された認知であり、異なる因果系列の交差に対応する即興である。この過去の記憶を作るプロセスにおいて、複数のバージョンが生み出され、改訂され、そして消失してゆく。この冗長性が時間性(temporality)を生み出す。複数の過去のバージョンを生み出しながらも／がゆえに、過去の記憶または忘却が成立しうるのは、いかにしてか。この経路依存と偶有性のバランスが集合的忘却を追う際の作業上の問いであった。

集合的忘却を冗長性の点から捉えるのが本稿の立場である。集合的忘却とは、冗長性の（意図的／非意図的に）操作による経路依存の結果、過去の使用に制限をかけようとする試みに他ならない。とするならば、既存の集合的忘却研究は、この経路依存のプロセス解明にどこまで迫っているのか。第3節で確認した集合的忘却のテンプレートとは、主として冗長性の減少に焦点を当て忘却を概念化していた。さらにネットワーク中心であり、そこにおいて時間性が忘却されている。よって経路依存を禁止語とすることが必要である。どのような順序と組み合わせの結果、ある可能性を選択することが難しくなり、特定のものへと安定／不安定化してゆくのか。この視点を踏まえるならN. マクラフリンの議論は、強いて言えば忘却を冗長性の増大という点から捉えようとしたものと言えるだろう。しかし、彼自身この増大プロセスをレトリックを用いて「消去」しており、その解明は現在も集合的忘却論における開かれた問いである。その際N. マクラフリンから得られる示唆は、論争――異なる因果系列の交差、すなわち「危機」――が時間性を区切るポイントになるかもしれないということである。それは反実仮想を方法として彫琢することでもある。

本稿もまた忘却を伴うものである。集合的忘却論をレビューする際、便宜上1980年代以降――メモリー・ブーム――の欧米の諸研究に限定してしまったが、これはそれ以前の研究や本邦における同様の試みを「除去」し潜在化する効果を伴う[54)]。

なぜ忘却が重要なのか。それは問題の原因が隠された場所であり、新しいアイデアの宝庫として、私

たちが日々仕事をする「可能性の空間」の一部だからである。集合的忘却をアーカイヴ化として捉えるなら、正典化(canonization)とは、あるアイデアが繰返され、永続的な地位を得ることに他ならない。アーカイヴ化と正典化のダイナミズムの探究(Assmann 2008: 104)を次の課題としておこう。

5.3 柳田国男は草餅を食べたか——中野重治の忘却術

これまで本稿は記憶／忘却という二項対立を暗黙の前提として議論を進めてきた。しかし、そのような振る舞いは、過去の不義やトラウマに対する赦しとしての忘却への問いを予め閉ざす効果を持つ(Douglas 1995: 26-7；Schudson 1995: 348-51; Olick 1999b: 344; Bowker 2005: 25; Nourkova and Gofman 2023: 4)。最後はある試論で締めくくりたい。

> 何月何日ということは覺えていない。(中野 1968: 1)

「草餅の記」と題された、本稿冒頭に引用した中野重治による柳田国男の晩年のエピソードは、やや唐突に著者による忘却の告白から始まっている。その内容は（柳田の）忘却について想起するものでありながら、その想起の部分的失敗はいかなる意味を持ちうるのか。

中野は、およそ30年にわたり「ひとりの文学読者として柳田国男を読んできた」（中野 [1961]1978: 130）柳田国男のファンを自称していた。1955年からは柳田邸の近隣に居住していたが、多忙を極め中々柳田国男を訪ねることが叶わないでいた[54]。そんな折、周囲から柳田の体調について聞き及ぶことになる。

長らくの無沙汰の詫びの手土産として持参したのが草餅であった。草餅は蓬を入れて搗いた餅で、江戸時代より女児の健やかな成長を祈願する上巳の節供（旧暦3月3日）において雛飾りに供えられる菓子である(亀井 1996: 80-5)[56]。蓬が芽吹くのが3月下旬から4月上旬であるため、中野が柳田を訪問したのも、1962年のその時期以降であると推測される。餅は節供や家庭イベントなどの晴れの日に食べるものであり、搗けば神仏に供え、他人へ贈答し、分け合って食べるものであった(亀井 1996: 33; 安室[1999]（2021: 30)。餅は神と人だけではなく、人と人を結ぶコミュニケーション・メディアといえよう。その機能は、家族の動静を近隣に知らせ情報共有を図ることにある（安室［1999］2021: 45)。であればこそ、草餅を搗きもってゆくことは、無沙汰を切断し、交流を再開する切っ掛けとしては、当時の中野にとっては最適なものであったと考えられる[55]。しかし、待ち受けていたのは冒頭のエピソードであった。「柳田さんの近況にまるで無知できていたことの證據なことを思い知らされたのだつた」（中野 1968: 2)と、中野は激しく落胆する。

この出来事から6年後「草餅の記」は発表された。ここでは草餅が記憶装置として機能している。すなわち、草餅の色、匂い、味が成城という場所に結びつく。草餅はエピソード全体を表象する提喩(synecdoche)なのである[56]。それゆえ、その草餅は、結びにおいて他ならぬ柳田自身により、食され、消化されねばならなかった。「私はただ、あの草餅を柳田さんが食べて下されたろうことを幸福とする」（中野 1968: 2)。アフリカやメラネシアのある文化では、すぐに朽ち果てるため、放棄するためだけに作られるものがある。それらは社会の成員たちが、もはや必要としないもの、思い出したくないものに対処する手段となる「は

かない記念碑」である（Harris et al. 2010: 273）。とするならば、ここで中野は草餅を記憶装置としつつ、それを作中で他ならぬ柳田自身に食させることにより、はかない記念碑へと昇華している。それは過去を受け入れるための文学的忘却術であった。「草餅の記」の結末は冒頭へと回帰する。それは想起の失敗ではなく忘却の成功であった。

何月何日ということは覺えていない。（中野 1968: 1）

注

1）もちろん、M．アルヴァクスが集合的記憶およびそれに類する概念を最初に、ただ一人用いた人物ではない（Olick et al. 2011: 25-9）。彼が集合的記憶概念を練り上げたのは1920～30年代の、ストラスブール大学の同僚たち、精神科医のC．ブロンデルや、歴史学者M．ブロック、L．フェーブルらとの交流によってであった。特にM．ブロックとL．フェーブルにより創始されたアナール学派は、集合的記憶概念を積極的に取り込み、その概念の継承に大きく貢献した。それゆえ、1980年代、大量移民時代を迎えフランスの国民的アイデンティティが問題となった際、集合的記憶概念は再登場が可能となったのである（Olick et al. 2011: 22-3）。

2）W．H．R．リヴァースは、「有用な芸術の消滅」（1912）において、オセアニアのある地域からカヌー、陶器、弓矢の技術が消滅したことについて社会学的説明をしていた。これらの技術は専門家のものであり、専門家が減少すれば技術の継承も危うくなる。この考えはF．バートレットのみならず、社会学者M．アルヴァクスにも影響を与えた（Douglas 1995: 18-9）。

3）ここには進化論的仮定に裏打ちされた個人主義的アプローチがある。当時、原始社会では個人の奔放な好奇心は社会が制限していたが、時代が進むにつれて社会的束縛から解放され個人は自律性を獲得すると考えられていた（Douglas 1987: 86）。

4）この作業は、これまでの論考（氏川 2022, 2023）同様、再帰的に行われる。すなわち、ある対象に学びつつその知見を当該対象自体に適用する（Huebner 2014: 219-20）。

5）この時間操作は、対象の範囲を拡大することで、慣習的思考を切断するための時空の発想法（heuristics）である（Abbott 2004: 110-61）。これにより一時点ではなく面で、さらには立体的に問うことが可能になる。すなわち、新しいアイデアの社会学が、いかに受容され、その過程でどのような論点が潜在化したのか。このようにローカルな文脈に位置づけ、一時点のみの読みを相対化することにより、「社会的プロセスが生み出す多様な経路」（Abbott 2004: 103）に焦点を当てることができる。

6）このような「偉大さ」の盲信は、従来の知識社会学や思想史における還元主義――偉大な個人／社会の二項対立に基づきアイデアの生成をどちらかに還元して説明する――の前提を形成する。多少戯画化すれば、それは次のような振る舞いからなる。①教科書の一章を割り当てられるような人物を取り上げ、②前期、後期の著作をまとめ、比較する。③大きな変化がない場合、後年開花するアイデアの萌芽を前期に見出すことで、思想的一貫性を示す。大きな変化が確認された場合、前期と

後期の断絶を強調し、その要因を生活史的エピソードや政治経済構造から説明する。例えば、氏川(2007)では、S. トゥールミンの議論のレイアウトの変容を、国家委員会における「ベルモント・レポート」作成の経験から説明している。

還元主義批判としては、例えば、R. K. マートンが次のように指摘している。「……経歴と、彼がそこで行った研究内容との間に機械的な結びつきなどはない。学問的な発展は、基盤となる社会構造や思想家の社会的立場を直接『反映する』という見解が支持できないということは、知識社会学の研究によって、ずっと昔に明らかにされている」(Merton 1979=1983: 137)。また、P. ブルデューも還元主義を「短絡の誤謬」――「作品をより広い社会的条件と経済的条件とに直接還元する誤り」(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 197) ――として批判している。

思想的一貫性を見出すことの問題点として、当時の文脈から切り離し、過度に体系性を強調することにより、抽象概念の歴史になってしまうとのQ. スキナーの批判が挙げられる。それは「誰一人として現実には到達したことのない水準の一貫性を持った、誰一人として現実には成功しなかった思想の歴史なのである」(Skinner 1988=1990: 68)。

7) 1990年代末、佐藤健二は「複数の柳田国男」という視点をすでに打ち出している。「テクストの中の、ある柳田は不当なまでに神格化され、別の柳田はだれも受け継がなかった。そして柳田自身が、彼の人生においてはうまく育てることができなかった柳田すら、そこにはありえた」(佐藤 2015: 282)。その意味で、本稿は約20年遅れ(!)の佐藤健二受容であると言えるだろう。

8) 新しいアイデアの社会学が対象とするローカルな状況には、セミナー、学会、学派、学部および出版物などが含まれる(Huebner 2014: 13; Adler-Nissen and Kropp 2016: 9)。

9) C. ギンズブルグは、歴史家の言語と証拠資料の言語とのあいだに存在する相違に注意し続けることが、時代錯誤に陥ることを回避するコツだとしている(Ginzburg 2012=2016: 76)。この「相違」の問題は、後述するR. コリンズ(1998)をめぐる書評の争点でもある。

10) これは別の角度から見れば、R. アドラー - ニッセンとK. クロップの「祖先選択」(Camic 1992)の問題である。その選択を可能にしたローカルな文脈を追うことも可能である。

11) ここで時代錯誤とは、「歴史家にとって馴染み深いものであるがゆえに実は本質的に過去へは適用不可能であることを蔽い隠してしまうようなパラダイムの無意識的な適用」(Skinner 1988=1990: 52)を意味する。

12) 氏川(2023)において、「書評」という形態を改めて論じた理由もここにある。

13) このように、アイデアを探究の共同体における問題解決をめぐる討論という試練に位置づける視点は古典的プラグマティズム――特に、C. S. パースおよびJ. デューイ――にも通底するモチーフである(氏川 2022: 196)。

14) 「もし柳田が生きていたとして、自らの意図をあらためて詳しく説明したとしても、それ自体は特権的な『正解』ではありえない。むしろ説明された時点における一つの解釈に過ぎず、それ自体が特定の時点と特定の形態とを有する一つの資料にすぎないのである」(佐藤 2015: 282)。

15) 革新的で知的に面白いアイデアを生み出すには、既存研究が暗黙裡に依拠する諸前提を徹底的に批

判した上で、新たに探究を方向付ける問いを打ち立てねばならない。その際、既成の問いを所与とするのではなく、複数の可能性がある中で、ある研究テーマがいかにして学術的研究の対象となりえたのか。どのような歴史的条件が、他でもなく、そのような形で対象を定式化することを可能にしたのかなどを問わねばならない。M. アルヴェッソンとJ. サンドバーグは、このプロセスの解明を問題化と名付ける(Alvesson and Sandberg 2013＝2023: 96-7, 121-8)。

16）「ブラックボックスを開く」(Latour 1987=1999)、「バニー・ベックの技法」(Becker 1998＝2012)等も同様の技法である。

17）R. スェドバーグは、H. ベッカーやA. アボットらの有効性は認めつつ、彼らが方法と理論の関係を扱っていない(それゆえ、断片的な記述に留まる)ことを批判している(Swedberg 2021: 122-3)。

18）その背景の一つにグローバリゼーションがある。「それぞれの社会には、共存し、そしてしばしば葛藤を含む複数の想起共同体が存在」(Erll 2017=2022: 128) することとなり、「記憶の危機」(Olick et al. 2011: 14) が生じた。他にはメディアの発展、デジタル革命などが挙げられる (Olick et al. 2011: 14; Erll 2017: 26)。

19）アーカイヴには保存と消去の両義性がある。なぜなら新たなアーカイヴの構築は、「過去を消し去り、『これから』の時代を現在として定義する創始行為」(Bowker 2005: 26)が含まれるからである。

20）それゆえ、他者は記憶の妨げになる場合もある (Zerubavel 1996: 285)。例えば、S. ハリスらは、グループで共同想起する場合、各個人の想起方法が衝突し、効率が低下する結果「共同抑制」と呼ばれる現象が発生することを紹介している(Harris et al. 2010: 268)。

21）このように、人名、民謡、地名というようにあえて情報量を増やすことが、かえって検索効率を高めるということは、近年の認知科学においても示されている。すでに知っていることと関連づけて記憶すれば、それだけ想起しやすくなる (Brown et al. 2014＝2016: 82; 鈴木 2016: 89; Erll 2017=2022: 112)。

22）さらに一般化すれば、「複数のコミュニティにまたがる人やモノの情報生態系をいかにモデル化できるか」(Bowker and Star 1999: 293)という問いに関る。

23）それゆえ、翻訳の際、「境界対象」と物質的実体を強調する訳語ではなく、あえて「オブジェクト」とカタカナ表記を採用した。

24）このような実践共同体の定義は、H. ベッカー([1982]2008=2016)、J. レイヴとE. ウェンガー(1991＝1993)の議論を下敷きにしている。

25）標準とは、「(テクスト的または物質的) オブジェクトを作成するために同意された規則のセット」である。標準は、時に法的機関による強制を伴いつつ、複数の実践共同体にまたがって作用する。それゆえ、大きな慣性を持ち、その変更には非常に大きなコストがかかる (Bowker and Star 1999: 13-4)。

26）ここで言語芸術とは、「耳の働きによって採集」(柳田 [1933]1998: 8)されたデータに基づく成果物を指す。口承文芸という表現も併せて用いている。

27）それゆえ、比較を可能にするデータベースの構築には、「各郷土の収穫を綜合し、遠く離れて住む

者の相助と交通とによって、新たに獲たものを互ひに利用する」インフラとしての研究者ネットワークが必要であると説く。

28）「分類システムとは、官僚的な仕事または知識生産などの何らかの作業を行うために、物事をその中に入れることができる（メタファー的または文字通りの）箱のセット」（Bowker and Star 1999: 10）である。理念的には、分類システムには、独自の分類原理が働いており、カテゴリーは排他的で、記述世界を完全にカバーする。

29）Gヴィーコのトポス的知とL. ウィトゲンシュタインの俯瞰的叙述の類似性については、上村（1998）を参照されたい。

30）このようなトポス的知はどこから来たのか。その原型の一つとして考えられるのが「旅」である。臼井吉見は柳田の『後狩詞記』について次のように述べている。「柳田さんの最初の仕事が、書物から得られたものでなく、旅によってもたらされたものであることは、とくと注目を要する点であろう。というのは、柳田さんが、ものを考えてゆく場合には、平凡な人間の生活ぶりが土台になっているということである」（臼井 [1962]1985: 384）。また佐藤健二も柳田の方法の形成を柳田自身の旅行経験と関連付け論じている（佐藤 2015: 92-125）。

31）トポス的知を通じ、遠く離れた事柄の間に類似性を見出す能力――インゲニウム――はバロック期の綺想主義において最も重要視された能力であった（上村 1998）。とするならば、柳田の共同想起を、バロック的想像力と見なすこともできよう。

　柳田自身は、この冗長性を「螺旋」として捉えていた。例えば、鎌田久子は、螺旋は柳田の学問的態度を読み解く際のキーワードであると指摘する。「先生はよく問題をあたためなさいとおっしゃいましたが、はじめは別のことが三つ四つとつながりをもってくるとわかるときがあるのです。いわば点が面積になるのですね」（大藤他 1971: 7）。

32）R. K. マートンは、セレンディピティ概念が受容、普及する過程において、当該概念の心理的側面のみが強調されたことに注意を促している。R. K. マートンによれば、セレンディピティは「センス」に留まらず「状況」をも含む概念である（Merton and Barber 2004: 230-98）。

33）このような間隔をおいた想起練習は極めて効果的であることは近年の認知科学において示されている（Brown et al. 2014=2016）。

34）柳田の「新人好み」は、新しいセッション相手を求めた結果として見ることもできる。K. ソーヤーは、集団創造性に関する研究のなかで、グループ結成後2～3年もすると、メンバー同士が親しくなりすぎ、新たな発見の機会が低下することを指摘している（Sawyer 2007=2009: 68）。

35）例えば、大藤時彦は、定本柳田国男全集に関する座談会のなかで、全集の総索引を作成することによる気づきとして、「柳田先生自身も違った場所で同じ地名のところを一つにして書かれたような間違いがあります」（大藤他 1971: 2）。カードに情報を移し替え、比較し、異同を判定することにより、誤りを可視化し得た。「言葉を紙上に書き記すことによって、ほとんど全く別の形による批判的な検討が可能になる」（Goody 1977＝1986: 94）。

36）B. シュワルツは集合的記憶を「世論」のようなものとして捉えている。どちらも、個人によって保

持されるが集約されると独自の意味を帯びるようになる（Schwartz 2016: 11）。この知見に基づき、彼はH．シューマンと、世論調査のデータからアメリカ大統領A．リンカーンのイメージの変遷を考察している（Schwartz and Schuman 2005）。

37）「人間は、自由に他の可能性を発見しようとできるが、そうした可能性は、彼らが他者に強制したり説得したりしてやらせられることで、限界づけられている」（Becker [1982]2008=2016: 410）。

38）M．シュドソン、B．シュワルツも過去の利用可能性は社会的に制限されていることを強調している（Schudson 1995: 359; Schwartz 2016: 18）。

39）「事例が時系列的に展開する際に、初期の時点での経路依存によって結果が固定されてしまうと仮定すべきではない」（George and Bennett 2005=2013: 235）。

40）例えば、コロンブス「以前」のアメリカの記憶、ドレフュス事件の「結末」――冤罪が晴れ、後にレジオン・ドヌール勲章授与――の記憶（Zerubavel 1996）。アメリカにおける朝鮮戦争の記憶（Kansteiner 2002: 192-3）。第一次世界大戦における1000万人にも及ぶ負傷生存兵の記憶、第二次世界大戦におけるドイツ空襲の記憶（Connerton 2008: 67-9）などである。

41）例えば、V．ヌルコヴァとA．ゴフマンは、「忘却の場」という視点を打ち出し、そこにおける忘却をもたらした実践および忘却に向けられた実践の再類型化を試みている（Nourkova and Gofman 2023）。

42）M．アルヴァクスは1930年にシカゴ大学に招聘され、自殺とフランス社会学の講義を担当した。その際、H．ブルーマーと出会っている（Olick et al 2011: 24）。

43）「サラトガ国立歴史公園では、アーノルドが奇妙な記念の対象となっている。……1777年10月7日、バーゴインの『[西]大砦』の出撃地であるこの土地で重傷を負い、同胞のためアメリカ独立戦争の決戦を制し、少将の地位を得た大陸軍で最も優秀な兵士を記念して。……訪問者がサラトガの戦いに精通していない限り、この歴史的標識からは、『大陸軍で最も優秀な兵士』が国家最大の裏切者でもあったことを知ることはないだろう」（Ducharme and Fine 1995: 1323-4）。

44）オハイオ・ギャングとは、「ハーディングの地元の友人ジェス・スミスや司法長官ハリー・ドアティらの倫理観の低さ、特に司法省から恩赦や便宜を取引する風潮」（Fine 1996: 1171）を指す。ティーポット・ドームとは、ワイオミング州にある海軍省石油備蓄施設。当時のA．B．フォール内務長官は、賄賂の見返りに入札無しで、この施設を民間企業にリースした。そこからティーポット・ドームは、政治腐敗と共和党失政の代名詞となった（Fine 1996: 1171-2）。

45）「白人入植者によるアメリカ・インディアンに対する暴力の記憶が生き続けているのとは対照的に、白人入植者にたいするアメリカ・インディアンの蛮行が想起されないのは、社会全体が忘れたいと願うからだけではなく、適切なスポンサー、関心ある聴衆、効果的なストーリー展開が欠如しているからである」（Fine and McDonnell 2007: 176）。

46）G．A．ファインとT．マクダネルによれば、過去30年間に出版された高校の歴史教科書42冊のうち、「褐色の恐怖」やマクウィリアムズ裁判に言及したものは1冊もない（Fine and McDonnell 2007: 178）。

47） もしモンゴメリー市が「抗議者たちのささやかな要求に同意していたら、ボイコットは終結し、R. パークスは忘れ去られていただろう」（Schwartz 2009: 130-1）。

48） それはまた左派志向のヨーロッパ知識人の中にJ. デリダ自身を位置づけることでもある（Lamont 1987: 593）。

49） フランスにおけるJ. デリダの人気の低下も社会学的な説明が必要なテーマだろう。この点についてM. ラモンは次のように言及するに留まる。「哲学者の間でのデリダ人気の低下は、デリダが1980年まで学位論文を書かないという選択をすることで、学問的職業規範を尊重することを拒否したことと関係していると考えられる」（Lamont 1987: 604）。

50） E. フロムは政治スタイルにおいてC. W. ミルズに近かった。しかし、C. W. ミルズはM. ヴェーバーやG. H. ミードを好んでいた。E. フロムの「自己」論はG. H. ミードと近かったが、E. フロムはシンボリック相互作用論の認知主義を否定していた。E. フロムはエスノメソドロジーの実証主義批判には共感していただろうが、E. フロムのアプローチは言語学的ではなく心理学的であり、日常生活ではなく歴史、政治を対象としていた。E. フロムは、G. ホマンズの社会学における心理学軽視批判に同意していたが、G. ホマンズの行動主義や合理的選択理論とは対立していた（McLaughlin 1998: 229）。

　またE. フロムの主要な支持者D. リースマン――1940年代、E. フロムはD. リースマンのセラピストであった――は、社会学の主流からもニューヨーク知識人ネットワークからも比較的疎外されていた。M. マコビーはD. リースマンの下で学んでいたが、メキシコでE. フロムから精神分析を学び、1970年にはE. フロムと共著で『メキシコ村の社会的性格』（1970）を出版するも、後に経営コンサルタント・作家に転身してしまった（McLaughlin 1998: 238）。

51） 正統と異端という枠組は、R. コリンズ（1998）と共に、C. キャミックとN. グロス（2001）へと継承されてゆく。

52） 2023年12月時点でのGoogle Scholarにおける当該論文の引用件数は81件である（https://scholar.google.co.jp/citations?hl=ja&user=CuBM0XUAAAAJ）。ちなみにN. マクラフリン（1998）は229件である（https://scholar.google.co.jp/citations?user=KPX7CUMAAAAJ&hl=ja&oi=sra）。

53） ここでは、集団ごとに採用されるテンプレートの違い（Fine and McDonnell 2007）という視点から、R. グランドマンとN. シュテールの忘却を考察したが、あくまでこれは一つの仮説にすぎない。

54） 例えば、竹内（2012）は、清水幾太郎の覇権と忘却について、P. ブルデューの界の理論を補助線としつつ、メディア知識人界における正系／傍系の二項対立によって描き出そうとしている。すなわち、知識人界内／外における傍系の清水による転覆戦略が、覇権と忘却の両方をもたらしたのである。

55） 中野重治は、1955年12月に世田谷区世田谷４－513（のちの世田谷区桜3－25－11）に転居している（松下 1998: 399）。その時点までに柳田に会ったのは３～４回しかないと回想している（中野［1955］1978: 125）。当時の中野は、1961年頃まで創作活動および政治活動に奔走していたことが年譜からうかがえる（松下 1998:398-400）。年譜を見ると1957年頃から柳田は高血圧のためしばしば寝込むことが多くなっていた（小田編 2019）。同年、柳田邸内の民俗学研究所が閉鎖となっている。

56）1939年には中野重治の長女、卯女（うめ）が誕生している（松下 1998: 394）。

57）年譜には柳田の元に様々な品が届けられていたことがうかがえる。餅に関しては、1959年2月18日、1961年2月20日、民俗学者岩崎敏夫への礼状の記述がある（小田編 2019: 409, 417）。

58）提喩とは、部分で全体を表すレトリックである（佐藤信夫他 2006: 260）。

文献

Abbott, Andrew, 2004, *Methods of Discovery: Heuristics for the Social Sciences,* W.W. Norton.

Abelson, Harold, Ledeen Ken, Lewis Harry R. and Seltzer Wendy, [2008]2020, *Blown to Bits: Your Life, Liberty, and Happiness after the Digital Explosion,* Pearson Education.（=2021，尼丁千津子訳『教養としてのデジタル講義――今こそ知っておくべき「デジタル社会」の基礎知識，日経BP.）

Adler-Nissen, Rebecca and Kristoffer Kropp, 2016, “A Sociology of Knowledge Approach to European Integration: Four Analytical Principles,” Rebecca Adler-Nissen and Kristoffer Kropp eds., *A Sociology of Knowledge of European integration: the Social Sciences in the Making of Europe,* Routledge, 1-19.

Alvesson, Mats and Jörgen Sandberg, 2013, *Constructing Research Questions: Doing Interesting, Sage*.（=2023，佐藤郁哉訳『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方――論文刊行ゲームを超えて』白桃書房.）

Arthur, W. Brian, 2009, *The Nature of Technology: What it is and How it Evolves,* Free Press.（=2011，日暮雅通訳『テクノロジーとイノベーション――進化／生成の理論』みすず書房.）

Assmann, Aleida, [1999]2006, Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses 3. Aufl, C.H. Beck.（=2007，安川晴基訳『想起の空間――文化的記憶の形態と変遷』水声社.）

――――, 2008, “ Canon and Archive,” Astrid Erll and Ansgar Nünning eds., *Cultural Memory Studies: An International and Interdisciplinary Handbook,* De Gruyter, 97-107.

Becker, Howard S., [1963]1973, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance,* The Free Press.（=2011，村上直之訳『完訳　アウトサイダーズ――ラベリング論再考』現代人文社.）

――――, 1998, *Tricks of the Trade: How to Think about Your Research While You’re Doing It.* The University of Chicago Press.（=2012，進藤雄三・宝月誠訳『社会学の技法』恒星社厚生閣.）

――――, [1982]2008, *Art Worlds, 25th anniversary ed., updated and expanded,* University of California Press.（=2016，後藤将之訳『アート・ワールド』慶応義塾大学出版会.）

Borowski, L.E., R.B. Jachmann und A.Ch. Wasianski, [1804]1912, Immanuel Kant : sein Leben in Darstellungen von Zeitgenossen: die Biographien, Deutsche Bibliothek.（=1967，芝烝訳『カント――その人と生涯: 三人の弟子の記録』創元社.）

Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant, 1992, *Réponses: pour une anthropologie reflexive,* Éditions du Seuil.（=2007，水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待――ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.）

Bowker, Geoffrey C., 2005, *Memory Practices in the Sciences,* MIT Press.

――――― and Star, Susan Leigh, 1999, *Sorting Things Out: Classification and Its Consequences, MIT Press.*

Brown, Peter C., Henry L. Roediger III and Mark A. McDaniel, 2014, *Make it Stick: The Science of Successful Learning,* Belknap Press of Harvard University Press.（=2016，依田卓巳訳『使える脳の鍛え方――成功する学習の科学』NTT出版.）

Camic, Charles, 1992, “Reputation and Predecessor Selection: Persons and the Institutionalists,” *American Sociological Review,* 57(4): 421-45.

――――, 2020, *Veblen: The Making of an Economist Who Unmade Economics*. Harvard University Press.

――――― and Neil Gross, 2001, “The New Sociology of Ideas,” Judith R. Blau ed., *The Blackwell Companion to Sociology,* Blackwell, 236-49.

Casey, Edward S., 1992, “Forgetting Remembered,” *Man and World*, 25: 281-311.

Certeau, Michel de, 1980, *Arts de faire,* Union générale d'éditions.（=1987，山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』国文社.）

Cicero, Marcus Tullius, [55 B. C.][1902]1969, De oratore. Leipzig.（=[1999]2005，大西英文訳『弁論家について（下）』岩波書店.）

Collins, Randall, 1998, *The Sociology of Philosophies: A Global Theory of Intellectual Change,* Belknap Press of Harvard University Press.

Connerton, Paul, 1989, *How Societies Remember,* Cambridge University Press.（=2011，芦刈美紀子訳『社会はいかに記憶するか――個人と社会の関係』新曜社.）

――――, 2008, “Seven Types of Forgetting,” *Memory Studies,* 1(1): 59-71.

Conway, Brian, 2010, “New Directions in the Sociology of Collective Memory and Commemoration,” *Sociology Compass,* 4(7): 442-53.

Csikszentmihalyi, Mihaly, 1996, *Creativity: Flow and the Psychology of Discovery and Invention,* Harper Perennial.（=2016，須藤祐二・石村郁夫訳『クリエイティヴィティ――フロー体験と創造性の心理学』世界思想社.）

Draaisma, Douwe, [1995]2000, *Metaphors of Memory: A History of Ideas about the Mind* [translated by Paul Vincent], Cambridge University Press.（=2003, 岡田圭二訳,『記憶の比喩――心の概念に関する歴史』ブレーン出版.）

Desmond, Matthew, 2014, “Relational Ethnography,” *Theory and Society,* 43: 547-79.

Douglas, Mary, 1987, *How Institutions Think,* Routledge & Kegan Paul.

――――, 1995, “Forgotten Knowledge,” Marilyn Strathern ed., *Shifting Contexts: Transformations in Anthropological Knowledge,* Routledge, 13-29.

Doyle, Arthur Conan, Sir, [1888]1993, *A Study in Scarlet* [edited with an Introduction by Owen Dudley Edwards], Oxford University Press.（=[1997]2014，小林司・東山あかね訳『緋色の習作』河出書房新社.）

Ducharme, Lori J. and Gary Alan Fine, 1995, “The Construction of Nonpersonhood and Demonization: Commemorating the Traitorous Reputation of Benedict Arnold,” *Social Forces,* 73(4): 1309-1331.

Ehrlich, Susan and Alice F. Freed, 2010, “The Function of Questions in Institutional Discourse: An

Introduction," Alice F. Freed and Susan Ehrlich eds., 2010, *"Why Do You Ask?": The Function of Questions in Institutional Discourse,* Oxford University Press, 3-19.

Emirbayer, Mustafa, 1997, "Manifesto for a Relational Sociology," *American Journal of Sociology,* 103(2): 281-317.

Engeström, Yrjö, Brown Katherine, Engeström Ritva and Koistinen Kirsi, 1990, "Organizational Forgetting: An Activity-Theoretical Perspective," Middleton, David and Derek Edwards eds., *Collective Remembering,* Sage, 139-168.

Erll, Astrid, 2017, Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen: eine Einführung, 3., aktualisierte und erw. Aufl., J.B. Metzler,（=2022，山名淳訳『集合的記憶と想起文化――メモリー・スタディーズ入門』水声社.）

Esposito, Elena, 2008, "Social Forgetting: A Systems-Theory Approach," Astrid Erll and Ansgar Nünning eds., *Cultural Memory Studies: An International and Interdisciplinary Handbook,* De Gruyter, 181-9.

Fine, Gary Alan, 1996, "Reputational Entrepreneurs and the Memory of Incompetence: Melting Supporters, Partisan Warriors, and Images of President Harding," *American Journal of Sociology,* 101(5): 1159-1193.

――― and Terence McDonnell, 2007, "Erasing the Brown Scare: Referential Afterlife and the Power of Memory Templates," *Social Problems,* 54(2): 170-187.

Gans, Herbert J., 1992, "Sociological Amnesia: The Noncumulation of Normal Social Science," *Sociological Forum,* 7(4): 701-10.

George, Alexander L. and Andrew Bennett, 2005, *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences,* MIT press.（=2013，泉川泰博訳『社会科学のケース・スタディ――理論形成のための定性的手法』勁草書房.）

Ginzburg, Carlo, 2012, "Our words, and Theirs: A Reflection on the Historian's Craft, Today," Susanna Fellman and Marjatta Rahikainen eds., *Historical Knowledge: In Quest of Theory, Method and Evidence, Cambridge Scholar Publishing,* 97-119.（=2016，上村忠男訳「わたしたちの言葉と彼らの言葉――歴史家の仕事の現在にかんする省察」『ミクロストリアと世界史――歴史家の仕事について』みすず書房，57-88.）

Goody, Jack, 1977, *The Domestication of the Savage Mind,* Cambridge University Press.(=1986, 吉田禎吾訳『未開と文明』岩波書店.）

Gross, Neil, 2003, "Richard Rorty's Pragmatism: A Case Study in the Sociology of Ideas," *Theory and Society,* 32: 93-148.

Grundmann, Reiner and Nico Stehr, 2001, "Why is Werner Sombart not Part of the Core of Classical Sociology?: From Fame to (near) Oblivion," *Journal of Classical Sociology,* 1(2): 257-287.

Harris, Celia B., John Sutton and Amanda J. Barnier, 2010, "Autobiographical Forgetting, Social Forgetting, and Situated Forgetting: Forgetting in Context,". Sergio Della Sala ed., *Forgetting,* Psychology Press, 253-284.

Heritage, John, 2010, "Questioning in Medicine," Alice F. Freed and Susan Ehrlich eds., 2010, "*Why Do You Ask?": The Function of Questions in Institutional Discourse,* Oxford University Press, 42-68.

Huebner, Daniel R., 2014, *Becoming Mead: The Social Process of Academic Knowledge,* University of Chicago Press.

Hutchins, Edwin, 1990, “The Technology of Team Navigation,” Jonene Galegher, Robert E. Kraut and Carmen Egido eds., *Intellectual Teamwork: Social and Technological Foundations of Cooperative Work,* Lawrence Erlbaum Associates, 191-220.

————, 2006, “The Distributed Cognition Perspective on Human Interaction,” Stephen C. Levinson and Nicholas J. Enfield eds., *Roots of Human Sociality: Culture, Cognition and Interaction,* Routledge, 375-98.

Jedlowski, Paolo, 2001, “Memory and Sociology: Themes and Issues,” *Time & Society,* 10(1): 29-44.

亀井千歩子，1996，『日本の菓子――祈りと感謝と厄除けと』東書選書.

Kansteiner, Wulf, 2002, “Finding Meaning in Memory: A Methodological Critique of Collective Memory Studies,” *History and Theory,* 41: 179-197.

桑原武夫，1961，「中野重治をめぐる雑談」『中野重治全集第十五巻月報』.（再録：1980，『桑原武夫集6』岩波書店，240-5.）

————，1962，「柳田さんの一面」『図書』10.（再録：1980，『桑原武夫集6』岩波書店，362-8.）

Lakoff, George and Johnson, Mark, 1980, *Metaphors We Live By,* University of Chicago Press.（=1986，渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店.）

Lamont, Michele, 1987, “How to Become a Dominant French Philosopher: The Case of Jacques Derrida,” *American Journal of Sociology,* 93(3): 584-622.

Lang, Gladys Engel. and Kurt Lang, 1988, “Recognition and Renown: The Survival of Artistic Reputation,” *American Journal of Sociology,* 94(1): 79-109.

Latour, Bruno, 1987, *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society,* Harvard University Press.（=1999，川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき――人類学的考察』産業図書.）

Lave, Jean and Wenger Etienne, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation,* Cambridge University Press.（=1993，佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習――正統的周辺参加』産業図書.）

Luria, A. R., 1968, Маленькая книжка о большой памяти: Ум мнемониста, Изд-во Московского университета.（=[1983]2010，天野清訳『偉大な記憶力の物語――ある記憶術者の精神生活』岩波書店.）

松下裕，1998，『評伝中野重治』筑摩書房.

McKenzie, D. F., [1986]1999, *Bibliography and the Sociology of Texts,* Cambridge University Press.（=2003，河合祥一郎訳「テクストの社会学」（抄訳）小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編『岩波講座文学1――テクストとは何か』岩波書店，213-44.

McLaughlin, Neil, 1998, “How to Become a Forgotten Intellectual: Intellectual Movements and the Rise and Fall of Erich Fromm,” *Sociological Forum,* 13(2): 215-46.

Merton, Robert K., 1979, *The Sociology of Science: An Episodic Memoir,* Southern Illinois University Press.（=

1983，成定薫訳『科学社会学の歩み――エピソードで綴る回想録』サイエンス社.）

――― and Elinor Barber, 2004, *The Travels and Adventures of Serendipity: A Study in Sociological Semantics and the Sociology of Science,* Princeton University Press.

Middleton, David and Derek Edwards, 1990, “Conversational Remembering: A Social Psychological Approach,” *Collective Remembering,* Sage, 23-45.

森直久，2022，『想起――過去に接近する方法』東京大学出版会.

中野重治，1955，「無欲の人」『現代日本文学全集月報』24.（再録：1978，『中野重治全集第19巻』筑摩書房，125-7.）

―――，1961，「選集をもとめる」『文学』14(3).（再録：1978，『中野重治全集第19巻』筑摩書房，129-32.）

―――，1968，「草餅の紀」『日本現代文学全集月報』89: 1-2.

Norman, Donald A., 2011, *Living With Complexity,* MIT Press.（＝2011，伊賀聡一郎・岡本明・安村通晃訳『複雑さと共に暮らす――デザインの挑戦』新曜社.

Nourkova, Veronika V and Alena A Gofman, 2023, “The ‘Sites of Oblivion’: How not to Remember in a World of Reminders,” *Memory Studies,* 1-18,（Retrieved December 11, 2023, https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/17506980231176039）.

Olick, Jeffrey K., 1999a, “Genre Memories and Memory Genres: A Dialogical Analysis of May 8, 1945 Commemorations in the Federal Republic of Germany,” *American Sociological Review,* 64(3): 381-402.

―――, 1999b, “Collective Memory: The Two Cultures,” *Sociological Theory,* 17(3): 333-48.

―――, 2007, “Collective Memory: A Memoir and Prospect,” *Memory Studies,* 1(1): 19-25.

―――, 2008, “From Collective Memory to the Sociology of Mnemonic Practice and Products,” Astrid Erll and Ansgar Nünning eds., *Cultural Memory Studies: An International and Interdisciplinary Handbook,* De Gruyter, 151-61.

――― and Joyce Robbins, 1998, “Social Memory Studies: From “Collective Memory” to the Historical Sociology of Mnemonic Practices,” *Annual Review of Sociology,* 24: 105-40.

―――, Vered Vinitzky-Seroussi and Daniel Levy, 2011, “Introduction,” *The Collective Memory Reader,* Oxford University Press, 3-62.

大藤時彦，1962，「柳田先生と国語教育」『教育の窓』10.（再録：1973，「柳田国男と国語教育」『柳田国男入門』筑摩書房，86-93.）

―――・鎌田久子・高藤武馬，1971，「『総索引・書誌・年譜』編集にあたって」『定本柳田国男全集　月報』36: 1-8.

小田富英，2019，『柳田国男全集　別巻一』筑摩書房.

Ragin, Charles C., 1992, “ ‘Casing’ and the Process of Social Inquiry,” Charles C. Ragin and Howard S. Becker eds., *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry,* Cambridge University Press, 217-26.

Reich, Rob, Sahami Mehran and Weinstein, Jeremy M., 2021, *System Error: Where Big Tech Went Wrong and How We Can Reboot,* HarperCollins Publishers.（＝2022，小坂恵理訳『システム・エラー社会――「最

適化」至上主義の罠』NHK出版.）

佐藤健二，1987,『読書空間の近代――方法としての柳田国男』弘文堂.

――――，2003,「『質的データ』論の位相――社会調査史からみた社会学史研究の一側面」『社会学史研究』25: 3-18.

――――，2015,『柳田国男の歴史社会学――続・読書空間の近代』せりか書房.

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大，2006,『レトリック事典』大修館書店.

Sawyer, R. Keith, 2007, *Group Genius: The Creative Power of Collaboration,* Basic Books.(=2009, 金子宣子訳『凡才の集団は孤高の天才に勝る――「グループ・ジーニアス」が生み出すものすごいアイデア』ダイヤモンド社.）

Schön, Donald A., 1983, *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action,* Basic Books.（= 2007，柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か――プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房.）

Schacter, Daniel L., 1995, "Memory Distortion: History and Current Status," Daniel L. Schacter, Gerald D. Fischbach, Joseph T. Coyle, Marek-Marsel Mesulam, and Lawrence E. Sullivan eds., *Memory Distortion: How Minds, Brains, and Societies Reconstruct the Past,* Harvard University Press, 1-43.

Schudson, Michael, 1995, "Dynamics of Distortion in Collective Memory," Daniel L. Schacter, Gerald D. Fischbach, Joseph T. Coyle, Marek-Marsel Mesulam, and Lawrence E. Sullivan eds., *Memory Distortion: How Minds, Brains, and Societies Reconstruct the Past,* Harvard University Press, 346-64.

Schwartz, Barry, 1996, "Introduction: The Expanding Past," *Qualitative Sociology,* 19(3): 275-82.

――――, 2009. "Collective Forgetting and The Symbolic Power of Oneness: The Strange Apotheosis of Rosa Parks," *Social Psychology Quarterly,* 72(2): 123-42.

――――, 2016, "Rethinking the Concept of Collective Memory," Anna Lisa Tota and Trever Hagen eds., *Routledge International Handbook of Memory Studies,* Routledge, 9-21.

――――― and Howard Schuman, 2005, "History, Commemoration, and Belief: Abraham Lincoln in American Memory, 1945-2001," *American Sociological Review,* 70(2): 183-203.

Sennett, Richard, 2008, The Craftsman, Yale University Press（=2016，高橋勇夫訳『クラフツマン――作ることは考えることである』筑摩書房.）

Shotter, John, 1990, "The Social Construction of Remembering and Forgetting," Middleton, David and Derek Edwards eds., *Collective Remembering,* Sage, 120-38.

Skinner, Quentin, 1988, *Meaning and Context: Quentin Skinner and His Critics* [edited and introduced by James Tully], Polity.（=1990，半澤孝麿・加藤節編訳『思想史とはなにか――意味とコンテクスト』岩波書店.）

Star, Susan Leigh, 2010, "This is not a Boundary Object: Reflections on the Origin of a Concept," *Science, Technology, & Human Values,* 35(5): 601-617.

――――― and James R. Griesemer, 1989, "Institutional Ecology, `Translations' and Boundary Objects: Amateurs and Professionals in Berkeley's Museum of Vertebrate Zoology, 1907-39," *Social Studies of Science,* 19(3): 387-420.

Sullivan, Lawrence E., 1995, "Memory Distortion and Anamnesis: A View from the Human Sciences," Daniel L.

Schacter, Gerald D. Fischbach, Joseph T. Coyle, Marek-Marsel Mesulam, and Lawrence E. Sullivan eds., *Memory Distortion: How Minds, Brains, and Societies Reconstruct the Past,* Harvard University Press, 386-400.

鈴木宏昭，2016,『教養としての認知科学』東京大学出版会.

Swedberg, Richard, 2014, *The Art of Social Theory,* Princeton University Press.

————, 2021, “What is a Method?: On the Different Uses of the Term Method in Sociology, *Distinktion: Journal of Social Theory,* 22(1): 108-28.

竹田旦，1984,「柳田先生の記憶術」『信濃教育』1176: 69-74.

竹内洋，2012,『メディアと知識人――清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社.

Tota, ByAnna Lisa and Trever Hagen, 2016, “Introduction: Memory Work-Naming Pasts, Transforming Futures,” *Routledge International Handbook of Memory Studies,* Routledge, 1-6.

上村忠男，1998,『バロック人ヴィーコ』みすず書房.

氏川雅典，2007,「トゥールミンの議論モデルの変容――批判から寛容へ」『ソシオロゴス』31: 1-12.

————，2022,「新しいアイデアの社会学の生成――可能性の空間におけるアノミーとしての創造性」『応用社会学研究』64: 195-219.

————，2023,「書評という試練――R. コリンズ『哲学の社会学』（1998）の2つの独創性」『応用社会学研究』65: 169-212.

臼井吉見，[1962]1985,「柳田國男を悼む」『臼井吉見集2』，383-6.

Vinitzky-Seroussi, Vered and Chana Teeger, 2010, “Unpacking the Unspoken: Silence in Collective Memory and Forgetting,” *Social Force,* 88(3): 1103-22.

Weinrich, Harald, 1997, Lethe: Kunst und Kritik des Vergessens, C.H. Beck.（＝1999，中尾光延訳『「忘却」の文学史――ひとは何を忘れ、何を記憶してきたか』白水社.）

Wittgenstein, Ludwig, 1967, “Bemerkungen über Frazers "The Golden Bough", Synthese, 17: 233-53.（＝1975，杖下隆英訳「フレーザー『金枝篇』について」大森荘蔵・杖下隆英訳『ウィトゲンシュタイン全集6』大修館書店，391-423.）

Wuchty, Stefan, Benjamin F. Jones and Brian Uzzi, 2007, “The Increasing Dominance of Teams in Production of Knowledge,” *Science,* 316: 1036-9.

安室知，[1999]2021,『餅と日本人――「餅正月」と「餅なし正月」の民俗文化論』吉川弘文館.

柳田國男，[1933]1998,「地名の話」『柳田國男全集　第七巻』筑摩書房，7-29.

Zerubavel, Eviatar, 1996, “Social Memories: Steps to a Sociology of the Past,” *Qualitative Sociology,* 19(3): 283-299.